

町田市障がい者青年学級

実践報告集



2018年度 第44号

はじめに

2018 年度町田市障がい者青年学級事業について、「実践報告集第 44 号」を刊行いたしました。この報告集は、障がい者青年学級(以下「青年学級」)の活動の様子を綴り、分析して課題を明らかにし、さらに今後の活動の展望を語ることを目的に編集したものです。編集にあたっては、日頃から活動をご支援いただいている「担当者」(ボランティアスタッフ)の皆様にご尽力いただきました。

2018 年度の青年学級の活動を振り返りますと、3つの学級で 166 名の学級生が参加しました。活動内容としては、通常の学級活動以外に公民館学級は恒例の大地沢青少年センターでの宿泊合宿を行いました。ひかり学級と土曜学級では宿泊合宿か日帰り旅行を行うかを活動の中で話し合い、ひかり学級では、貸し切りバスで相模原公園へ出かけ、土曜学級はロマンスカーで小田原見学となりました。また年度末の成果発表会では各学級ともに新しい歌の作成や、日頃の思いを作文や劇を通して表現するなど、精力的な発表を行いました。特にそれぞれ 4 名と 2 名の新たな仲間を迎えた公民館学級と土曜学級では、新人学級生を交えての学級活動が他の学級生にも刺激を与え、新たな学級活動を生み出す土台になりました。

一方で、担当者の体制は必ずしも充足しているとはいえ、担当者募集のために、市内外の大学・専門学校へのポスター掲示依頼や授業・ガイダンスでの PR、市内町内会の掲示板へのポスター掲示など積極的に広報活動を行い、結果として 13 名の方に担当者として新たに参加いただくこととなりました。

青年学級に参加する学級生を取り巻く環境は、ここ数年目まぐるしく変化しています。2014 年 1 月、我が国は「障害者権利条約」を批准しました。国連総会で採択された 2006 年以後、障害者虐待防止法や障害者総合支援法の施行、障害者差別解消法の成立、障害者雇用促進法の改正など、さまざまな制度改革を経たのち批准しました。この条約は様々な分野における権利実現のための取り組みを締約国に対して求めています。教育

を受ける権利についても、同条約第 24 条において規定しています。

また、町田市においても、2016 年 3 月には、障がいのある人の施策の基本計画として、「第 5 次町田市障がい者計画」が策定されました。この計画では、障がいのある人が希望する学びや文化芸術・スポーツ活動に参加しやすくすることを明記しました。

こういった条約の批准や計画の策定がされる中、2016 年 7 月には世界でも類を見ない凄惨な事件が津久井やまゆり園で起きました。また、2018 年 1 月には旧優生保護法による強制不妊手術が提訴され、改めて社会の中で問われることになりました。

また、文部科学省が実施する「障害者の多様な学習活動を総合的に支援するための実践研究」委託事業を受託し、障がい者の生涯学習の推進のため、若葉とそよ風のハーモニーコンサートに向けた活動を中心に、コンサート本番だけでなく、実行委員会での話し合いなどのコンサートが形作られていく過程を描くことができたと取り組みました。

このような時代に、障がいがあるといわれる人々が主体的に学び、社会参加し、自らの生を肯定し、地域で生活していくためにも、社会教育事業としての青年学級をより充実させる必要があります。町田に根付いた青年学級事業ですが、さらに社会の中で理解を深められ、より多くの市民の皆さんの参加を得て、事業を展開していけるよう努力と研鑽を重ねていきたいと考えています。

末筆になりましたが、事業の実施、「実践報告書」の作成など、日ごろから活動をご支援いただいている担当者の皆様、関係者の皆様のご尽力に感謝申し上げます。

2020 年 1 月

町田市生涯学習センター

2018年度障がい者青年学級(学級実施日)

回	月 日	活 動 内 容 (活 動 場 所)
	4.8 日	ひかり学級 青年学級を語る会(ひかり療育園)
	4.14 土	土曜学級 青年学級を語る会(生涯学習センター。以下「生涯セ」)
	4.15 日	公民館学級 青年学級を語る会(生涯セ)
1	6.3 日	ひかり学級 開級式(ひかり療育園) 午後1時半～午後4時
1	6.9 土	土曜学級 開級式(生涯セ) 午後1時半～午後4時
1	6.10 日	公民館学級 開級式(生涯セ) 午後1時半～午後4時
2	6.17 日	公民館学級・ひかり学級(生涯セ・ひかり療育園) 午前10時～午後4時
2	6.23 土	土曜学級(生涯セ) 午前10時～午後4時
3	7.1 日	公民館学級・ひかり学級(生涯セ・ひかり療育園) 午前10時～午後4時
3	7.14 土	土曜学級(生涯セ) 午前10時～午後4時
4	7.15 日	公民館学級・ひかり学級(生涯セ・ひかり療育園) 午前10時～午後4時
4	7.28 土	土曜学級(生涯セ) 午前10時～午後4時
5	9.2 日	公民館学級・ひかり学級(生涯セ・ひかり療育園) 午前10時～午後4時
5	9.8 土	土曜学級(生涯セ) 午前10時～午後4時
6	9.16 日	公民館学級・ひかり学級(生涯セ・ひかり療育園) 午前10時～午後4時
6	9.22 土	土曜学級 日帰り旅行(小田原) 午前10時～午後4時
7	10.7 日	ひかり学級 バスハイク(相模原公園) 午前8時半～午後4時半
7	10.13 土	土曜学級(生涯セ) 午前10時～午後4時
7	10.14 日	公民館学級(生涯セ) 午前10時～午後4時
	10.21 日	若葉とそよ風のハーモニー実行委員会(コメット会館) 午後1時半～午後4時
8	10.27 土	土曜学級(生涯セ) 午前10時～午後4時
8	10.28 日	ひかり学級(ひかり療育園) 午前10時～午後4時
8	11.4 日	公民館学級(生涯セ) 午前10時～午後4時
9	11.10 土	土曜学級(生涯セ) 午前10時～午後4時
9	11.11 日	ひかり学級(ひかり療育園) 午前10時～午後4時
9	11.17 土	公民館学級 合宿(大地沢青少年センター)
10	11.18 日	
10	11.24 土	土曜学級・わかそよ実行委員会(生涯セ) 午前10時～午後4時
10	12.2 日	ひかり学級・わかそよ実行委員会(ひかり療育園) 午前10時～午後4時
11		公民館学級(生涯セ) 午前10時～午後4時
11	12.8 土	土曜学級(生涯セ) 午前10時～午後4時
12・11	12.16 日	公民館学級・ひかり学級(生涯セ・ひかり療育園) 午前10時～午後4時
12	12.22 土	土曜学級(生涯セ) 午前10時～午後4時
13	1.12 土	土曜学級(生涯セ) 午前10時～午後4時
12	1.13 日	ひかり学級・わかそよ実行委員会(ひかり療育園) 午前10時～午後4時
13	1.20 日	公民館学級(生涯セ) 午前10時～午後4時
14	1.26 土	土曜学級(生涯セ) 午前10時～午後4時
13	1.27 日	ひかり学級(ひかり療育園) 午前10時～午後4時
14	2.3 日	公民館学級・わかそよ実行委員会(生涯セ) 午前10時～午後4時
15	2.9 土	土曜学級(生涯セ) 午前10時～午後4時
14	2.10 日	ひかり学級(ひかり療育園) 午前10時～午後4時
15	2.17 日	公民館学級(生涯セ) 午前10時～午後4時
16	2.23 土	土曜学級 成果発表会(生涯セ) 午前10時～午後4時
15	2.24 日	ひかり学級 成果発表会(生涯セ) 午前10時～午後4時
16	3.3 日	公民館学級 成果発表会(生涯セ) 午前10時～午後4時
	3.10 日	わかそよ実行委員会(生涯セ) 午後1時半～午後4時
	3.24 日	わかそよ実行委員会(生涯セ) 午後1時半～午後4時
	3.31 日	わかそよ結団式(生涯セ) 午前10時～午後4時

第 1 部

2 0 1 8 年度

学級活動の概要

1. 青年学級のねらい

青年学級開設当初は20名に満たなかった学級生も、現在は十倍近い人数になり、3つの学級にわかれてそれぞれ独自の活動を展開しています。各学級ともに、青年学級開設当初からの目標である「生きる力・働く力の獲得」のもと、「自治」「生活づくり」「文化の創造」という3つの柱を軸に活動を行ってきました。

ここでいう3つの柱についてですが、まず「自治」とは学級生自身が活動を企画し、運営していくことを意味します。一人ひとりの学級生の意見をもとに、それを取りまとめる班長・副班長を中心とした集団活動が進められ、さらにその班長や副班長によって構成される班長会で学級全体を見渡していく、というような民主的なプロセスを重要視してきました。そして何よりも大切にしてきたことは、学級生がなにものにも束縛されることなく、一人ひとりの思いを自由に語るということです。とはいうものの、月2回の限られた活動のなかで、企画から運営まですべてを行うということは、たやすくありません。しかし、それらを大切にしていくことで、自分自身の意見を述べる機会や経験を持ちにくかった学級生一人ひとりの主体性は、確実に培われてきたのです。

次に「生活づくり」です。これは活動のなかでお互いの要求、職場や家庭での喜びや哀しみなどのさまざまな思いを伝え合い、一人ひとりの生活の様子や課題を集団の場に出し、その思いや要求を集団で受け止め共有していくことです。そのことを通して、自らの生活を振り返り、自分自身の存在を肯定し、人を思いやる仲間づくり・集団づくりが行われてきました。この集団での経験が、現実の厳しい生活に向き合い、積極的に自分の生活上の困難に立ち向かっていく力になるのではないかと考えられます。

このような自治的な集団をもとに、学級生の生活要求や課題を反映させることでつくられていく活動は、既成のものではない独自の「文化の創造」を通して、具体的なかたちを与えられ、さらに深められていきます。そ

れにより、学級生が活動のなかで実質的な主体者となり、ひいては生活場面でも主体的な存在となっていくことを目指しています。

実際の活動では、劇や音楽、絵などの様々な創作活動を素材として取り組み、経験の幅を広げながら活動を創りだしてきました。そして、このような「文化の創造」から、学級生の要求や働くことの誇り、喜び、苦しみ、仲間への思いなど、生活実感に根ざしたものを取り入れ、オリジナルソングに代表されるような、青年学級独自の表現文化活動を作り上げ、他者へアピールする力を築きあげてきました。

このように、文化活動に積極的に関わり、「文化の創造」を担っていくことは、自らの生活を振り返り、作り上げ、学級生が主人公として人生を切り拓いていく力につながると考えられます。

「文化の創造」活動の延長として、1988年からスタートした『若葉とそよ風のハーモニーコンサート』（以下、わかそよ）も、2017年5月に18回目が開催され、またこれに類する催し物が開かれるなどしていますが、これまでの青年学級の実践から、地域に打って出たコンサートであり、そこでは長年培ってきた学級生の自治の力が大いに発揮されています。

「自治」「生活づくり」「文化の創造」の3つが歯車のように回りながら学級生たちの生活をより豊かなものにしていき、大きな力になっていくことが、これまでの実践のなかで確認されてきています。このことを踏まえ、今年度もそれぞれの学級で実践が展開されました。

2. 青年学級の概要

(1) 各学級の活動の概要

青年学級は、現在、3つの学級にわかれて月2回の活動を行っています。そのうち「公民館学級」と「ひかり学級」は日曜日、「土曜学級」は土曜日に活動しています。

2018年度は3学級あわせて学級生166名（年度当初時点での在籍者数）、担当者52名（年度末時点で担当者または当日担当者）

して活動に関わっていたボランティアの人数)で活動を行いました。一年間の活動は6月の開級式から、秋の合宿や日帰り旅行を挟んで、3月の成果発表会までの間に公民館・ひかり学級は原則として毎月第1・第3日曜日に、土曜学級は毎月第2・第4土曜日に行い、それぞれの学級で年14~15回の活動を行いました。また、活動体制としては、土曜学級が班体制、公民館学級とひかり学級がコース制を取りました。

(2) 活動日の大まかな流れ

タイムテーブルは3学級ともに概ね次のとおりでした。

10時~	朝のつどい
10時30分~	コース・班活動 (途中、昼食を挟む)
15時30分~	帰りのつどい
16時	終了
16時~	班長会など

班長・副班長は、コースや班をまとめると共に、「班長会」に出席し、他のコースや班との連絡を取り合っ、各学級全体の活動について話し合い、学級の自治活動を行いました。他にも、公民館学級では、朝夕のつどいについて話し合う「つどい委員会」が帰りのつどいの後に行われました。土曜学級では、班毎に交代制でつどいについて話し合われました。

(3) 一年間の学級活動の流れ

4月	学級を語る会
6月	開級式
7~2月	月2回の学級活動 (8月は夏休み、9~11月に合宿や日帰り旅行あり)
2~3月	成果発表会

3. 青年学級のこれまでの歩み

1974年度に開設された青年学級は体制面に着目すると、その歴史の中に大きな4つの節目をとらえることができます。すなわち、コース制の始まり(1985年)、ひかり学級の発足(1991年)、土曜学級の発足(1997年)、

とびたつ会の発足(2004年)です。そしてこの節目を境にして、5つの時期に分けることが可能となります。

(1) 青年学級の発足と実践から生まれた3つの柱

【1974年度~1984年度】

第一の時期は、青年学級の実践の方向性を模索する中から実践の中核となる3つの柱を確立した時期と言えます。この3つの柱とは、素材として表現活動を伴う文化的な創造活動を重視すること、集団のかたちとして自治的な集団をめざすこと、主題としてそれぞれの生活を活動の中心にすえることです。

こうした3つの柱は、それぞれ、劇づくりを通じた仲間づくりをめざした時期(1974年~1977年)、自主的な活動を重視した時期(1978年~1980年)、生活を見つめ直した時期(1981年~1984年)という3つの時期に対応しており、実践の中から生み出されてきた柱そのものと言ってよいでしょう。また、発足当初20名だった学級生の数は、1984年度には63名になっていました。

(2) コース制のはじまりとその発展の時期

【1985年度~1990年度】

第二の時期は、コース制の実施によって始まる時期ですが、第一の時期の成果を受けて、内容別のコース活動に分かれ、それぞれのコースごとにその内容をじっくり深めていく中で、生活づくりをめざすこととなりました。

この時期の生活づくりというねらいが具体的な成果となってあらわれた例に、「わかそよ」が産声を上げたことが挙げられるでしょう。それぞれの生活の中で感じている想いを歌に託して地域に向けて発信することを通じ、一人ひとりの新たな生活の創造が始まったと言えます。

また、こうした活動の中から、全国障害者問題研究会の全国大会に参加したり、パリで開催された国際会議に参加したりする学級

生が現れるようになってきました。

生活づくりという目標のもと、地域にアピールしていく活動は、いろいろなところで実を結び始めたと言ってよいと思います。

この間、参加希望者は増加を続け、1990年度には学級生が99名を数えるようになりました。活動の充実が、青年学級の存在を広く市民にアピールしたことも、希望者の増加に一役買っていると言えるでしょう。

(3) ひかり学級への分級による2学級体制の時期

【1991年度～1996年度】

第三の時期は、学級生の増加という事態に対応するためにひかり学級の誕生から始まる時期です。

学級生が増加する中で、言語的コミュニケーションが難しく、多くの介助を必要とする障がいのある学級生の姿も見られるようになりました。そうした生活上の困難を抱えた学級生がいる一方で、問題が差し迫っていない学級生も少なからずいるという状況は、学級生の多様化も意味していました。

こうした状況下では、学級全体としての共通の目標を以前のように維持することは、しだいに困難になってきました。しかしながら、それは一方で今までの流れを継承しつつ、多様な要求に応える実践を繰り返してきた時期であると言えるでしょう。

社会への大切なアピールの場「わかそよ」も、青年学級の大規模化のため、隔年開催となりましたが、ミュージカルという新しい表現を盛り込みながら発展を遂げています。またこの時期、海外研修の機会を与えられる学級生が何名か生まれました。

(4) 土曜学級の誕生による3学級体制の時期

【1997年度～2003年度】

第四の時期は、土曜学級の誕生によって3学級の体制が始まった時期です。土曜学級は、最初、休日の小学校の校舎を借りるかたちで発足しました。活動の際、車いすの方が一部

利用できない場所がありましたが、2002年に公民館が現在のビルに移ってからは、公民館で活動できるようになりました。「自治」「生活づくり」「文化の創造」の3つの柱を土台にしながらも、公民館学級、ひかり学級、土曜学級のそれぞれが独自の活動を展開するようになりました。

この時期、公民館学級の学級生である高坂茂さんが、日本で最初の本人活動の会「さくら会」結成の中心メンバーとなり、町田の青年学級にも本人活動の成果を持ち帰ろうという思いで活動を始めましたが、2000年3月に志し半ばで職場の事故で亡くなるという大変大きな出来事がありました。「町田にも本人活動を」という動きは、こうした中で芽生え始め、高坂さん亡き後は、その遺志を引き継ぐかたちでいろいろな試みがなされ、とびたつ会の発足へとつながる流れを作り出しました。

(5) とびたつ会の誕生 ～青年の活躍の拡がり

【2004年度～現在】

第五の時期は、青年学級からとびたつ会が生まれ、市主催事業としての青年学級と自主サークルとしてのとびたつ会が、並び立つ体制を開始した時期です。とびたつ会は、形式的には、青年学級とは別の組織ですが、青年学級の活動を通して本人活動の重要性を自覚したメンバーによる会です。しかし、とびたつ会にも青年学級に参加した経験のない青年が加わるなど、次第に独立した活動をするようになりましたが、学級の終わった後の交流や学級行事などへのとびたつ会メンバーの参加、「わかそよ」や、それに類する催し物の共同開催など、両者は深い関係を今後も持ち続けていくことになるとおもわれます。

また、とびたつ会の発足によるメンバーの移動が、結果的に学級生の受け入れ能力を超えてしまった青年学級に新たなメンバーを受け入れる余地をもたらしました。しかし、短期的には学級をひっぱっていくリーダー的存在が抜けることを意味しており、学級活動に影響をもたらすことになりました。しか

し学級生の中からは新しくリーダーシップを発揮する存在が現れ始め、そのリーダーシップのもとで新しい活動の展開が見られるようになりました。

またコミュニケーションの多様化によって、これまであまり発言ができていなかった青年たちの主張が学級活動に反映され始めています。それは自ら発話や文字を書くことができずコミュニケーションが難しいため、これまで話し合いや作文など「ことばを使つての活動」にはあまり参加できなかった青年たちが活躍するようになったということです。

これは「スイッチパソコン」や「指文字」など、支援方法の充実が図られたことが大きいのですが、コミュニケーションが難しいとされる青年たちのことばの世界が拓かれたということ以上に、学級の場面での存在感が大きく増したという変化がありました。

学級では表現活動を通じて主体性を獲得する場面が多くあります。例えば実際に歌うことはできなくても学級ソングの作詞をして発表の舞台に上るといった経験を通じて主体性を獲得する青年たちが出てきました。

こうした青年たちが表舞台に出ることで、学級の雰囲気にも変化の兆しが生まれています。これが社会に受け入れられるにはまだまだ厳しい状況ですが、40年を越える学級の歴史で貫かれている理念に新しい芽吹きとなったともいえるでしょう。

4. 3学級に関わる今後の課題

(1) 新人学級生の継続的受け入れと担当者体制の充実

青年学級の抱える課題として、新人学級生の継続的な受け入れの問題があります。当初20名弱の人数からスタートした青年学級も毎年10名程度の新たな学級生を受け入れてきましたが、担当者不足などの理由から新人学級生を受け入れられない状況が2001年から発生していました。しかし、将来構想検討委員会での話し合いもあり、新人学級生を2010年からは募集できるようになりました。

それに伴って学級生の人数も3学級全体で166名となりました。

また、会場面でも生涯学習センターとひかり療育園だけでは限界があります。現在の3学級体制（公民館学級、ひかり学級、土曜学級）で、どこまでの学級生を受け入れることができるか、会場や規模の面からの検討も必要となっています。

2018年度には若干名の募集に対し、13名の応募がありましたが、体制・規模の面から考えても全員の受け入れは難しく、やむを得ず抽選により、4名を受け入れることとなりました。

また、担当者体制が厳しい状況であることに変わりありません。現在の担当者募集方法（「広報まちだ」での募集記事、地域の自治会等を通じての担当者募集のビラの配布やポスターの掲示、近隣の大学・専門学校へのポスター掲示及び授業やガイダンス等での担当者募集の説明など）に加え、大学のボランティアサークル等との連携やボランティア講座の活用など、担当者を継続的に安定して確保する方策が模索されてきました。

担当者体制は単純にマンパワーの問題だけではなく、担当者として主体的に学習活動に関わる以上は、単に「一市民としてのボランティア」として参加する以上の資質と取り組みが求められます。そのために担当者会を充実させ、参加を促していくことも必要とされています。これまでの方向性を検証し、人材確保・育成についても検討が必要な段階になっています。

(2) 青年を取り巻く環境の変化への対応

学級に参加する青年の状況も大きく変化しつつあります。障がい者施策の影響もあり学級生を取り巻く生活環境や就労状況もここ数年大きな変化ができています。新しく参加している学級生でも一般企業で働く人がいる一方で、高度なケアが必要な人も増えています。

長年学級に参加してきた青年も、グループホームや通勤寮、生活寮を利用し、仕事に就いて得られた給料の使い方の訓練を受けた

り、自らの将来について考えたりするなど、自立にむけて活動するようになってきました。特にここ数年、市内にもグループホームが増え、自宅からグループホームへ移る青年も増えていきます。現時点ではグループホームへ移ったことにより青年学級に通えなくなるということはありませんが、学級生の置かれている状況を把握することがこれまで以上に重要となってきています。

加えて、こうした家族の高齢化や生活環境の変化により、送迎の必要性も高まってきています。これまでも送迎検討委員会で青年学級における送迎の課題について検討し、一時送迎を行ってきていますが、今後、より一層、送迎に対するニーズが高まっていくことが予想されます。

そして、これらの青年学級の将来像や、青年を取り巻く状況の変化、送迎等の課題について、生涯学習センター職員や担当者、家族だけでなく、青年学級の主体者である学級生と一緒に考えていき、その中で本来の青年学級の意味を再確認し、これからの発展について将来的な展望を持っていくことが、今後の大きな課題となっています。

体制面の語句の説明

青年……発足当初より、学校を卒業して社会に出た知的障がい者の社会教育の場は「青年学級」という名称で活動が進められ、社会的にも認知され今日にいたっています。その経過の中で学級生に対して青年という呼び方が定着しています。実際には青年期を越えた学級生が多数をしめるわけですが、その活動の若々しさなどもあって、違和感をあまり覚えることなく使われてきたと言えます。

担当者……青年を支援し、共に活動する人。参加資格は18歳以上の人。学級日の運営だけではなく、担当者会や総括会議への参加、学級ニュースの作成、実践報告集の校正作業なども活動に含まれています。

当日担当者……仕事や授業などの都合により、担当者会への参加が難しいため、学級日のみ参加する担当者のこと。(役割は担当者と同様)

コース・班制……青年学級での自治活動を展開するための、10～20人の基礎集団。やりたいこと(音楽・料理・スポーツ・工作など)を参加者が選び、希望別に分かれた集団のことです。

つどい……コース・班活動に入る前に、学級参加者全員が集まって歌をうたったり、見学者の紹介をしたり、近況報告をする場。朝と帰りに行っています。

成果発表会……年度の終わりに、1年間の活動の成果を発表する場。今年度、3学級ともに生涯学習センターで行いました。

青年学級を語る会……学級生が年度の初めに学級活動について話し合う場。前年度の反省と新年度の活動について学級ごとに話し合いを行なっています。

とびたつ会……青年学級よりも、より青年が主体的に活動することをめざした本人活動の会で、発展学級としての性格も併せもっています。2004年に発足。

担当者会……青年学級に参加する担当者が集まって、週に1回開かれる会議で、学級ごとに行っています。月2回の活動の準備や反省、活動やその他の場面での学級生との関わりの中で青年が表現する

中から、青年の求めていることは何なのか、その実現に向けてどうしたらよいか、それをどのように今後につなげていくのかを話し合います。各学級の担当者会で2名程度の「学級主事」が選出され、会の進行をしています。

調整会……担当者から選ばれた学級主事と生涯学習センター職員で構成。青年学級を実施するにあたっての全体的な条件整備や調整を行い、担当者会に提示します。また学級間の情報交換・共有を図る会です。

父母会……青年の家族が、青年たちが現在抱える問題や将来の生活に抱える不安などを改善・解消するために設けている話し合いの場、及びその集団です。

送迎検討委員会……各学級から選出された数名の担当者(送迎委員)で構成される委員会。青年の通級に欠かせない送迎の保障について話し合い、取り組んでいます。

将来構想検討委員会……生涯学習センター長、生涯学習センター職員、各学級から1～3名程度ずつ代表として選出された担当者(将来構想検討委員)、とびたつ会支援者で構成される委員会。青年学級の中長期的な将来像を検討するために組織されていましたが、2012年度以降は開催されていません。

若葉とそよ風のハーモニー……青年学級の活動から生まれた学級ソングや劇を社会に向けて発信していく場として、1988年から町田市民ホールで行っている実行委員会形式のコンサートです。活動の中では、“わかそよ”と略されます。

活動内容の語句の説明

学級ソング……学級独自で作られ歌われる歌のこと。青年のことばや姿、口ずさんだフレーズなどを元に歌としてまとめています。こうした学級ソングはつどいの他、コース活動中、行事などの場で一緒に歌うことで共有され、学級の一体感と盛り上がりの形成に一役買っています。既製の 대중文化におけるポピュラー

な曲ではなく、障がいを持つ青年たちの生活実感や思いを反映したものです。それは、民衆文化としての自分たちの「文化の創造」という青年学級で大事にされてきたテーマを象徴しています。

素材……実際の学習活動におけるテーマや取り組みのもとになるもの。具体的には青年から直接的・間接的に出される要求や生活状況などで、それを共有することで活動を展開しています。

思い起こし・近況報告……活動での話し合いの基本となるもの。青年学級での話し合いは多様な青年が参加しているため、青年の発言をまとめるだけではなく、意思表示を確認してコース・班全体で共有する作業が必要になってきます。青年一人ひとりの思いを共有するために活動の基本的なことを話したり、個人として話しやすい身の回りのことが話題にされたりしています。

作品づくり……学級では一人ひとりが絵を描いたり、ねん土を作ったり、またコース・班全体で作品づくりに取り組んでいます。いわゆる工作的なものだけではなく、作った学級ソングをレコーディングでCDにまとめたり、作文や絵画を蓄積して文集にまとめたりすること、調理活動なども含まれます。

表現活動……青年学級では二つの使い方をする活動で、一つは歌や劇といったコース・班で通常行われている「パフォーマンス活動そのもの」、もう一つは、主に成果発表会やクリスマス会など全体で行う催し物で作文を朗読したり、作った歌を披露したり、外出で調べてきたことを発表したり等、「活動内容そのものの紹介のための二次的な表現活動」との二つに分けられます。

いずれにしても成果発表会という一年の締めくくりが大きな目標になっており、成果発表会に向けて練習を重ねたり、発表のためにこれまでの活動を振り返り表現としてまとめあげたりすることで、単に青年の内部表出だけではなく、コース・班全体の活動を外在化するという意

義もあります。

本人活動……障がい当事者が決定権をもったグループ活動のこと。日本における本格的な本人活動の芽は、1991年の育成会全国大会本人分科会にあると言われていています。この時結成された「さくら会」には、町田からも高坂茂さんという青年学級の先輩も参加されました。

それまでは、多くの場面で能力がないとされ、意見表明や自己決定等の機会が剥奪される傾向にあった知的障がいのある人たちが、「自分たちのことは自分たちで考えよう」と自らが社会変革の担い手であることを自覚し、学習や行動をする活動に取り組み始めました。実際の活動は幅広く、福祉の制度や自分たちの権利についての学習活動や、レクリエーションなどを内容としています。

スイッチ・指文字・筆談……数年前より重度の肢体不自由や知的障がいのため、あるいはいわゆる自閉症などのために、言語的コミュニケーションが苦手とされる青年を中心に、スイッチパソコンで気持ちを話す方法が取り入れられてきました。現在では、パソコン自体は使用せず、通訳者が青年の体の一部に触れ、五十音を発音しながら一文字ずつ言葉を選び出していく「スイッチ」や通訳者が青年の一方の手（指）に手を添え、通訳者の掌に文字を書いていく「指文字」、青年が持つペンに手を添えて文字を書く「筆談」などがあり、コミュニケーション方法も多様化しています。また、言語でコミュニケーションをとる青年も思いや意見を語る際、補足的にこれらを使う青年も増えてきています。

また、パニックのような行動を見せた青年に対して気持ちを聞き、そのときの本人の考えや反応などを理解し、周囲の対応や受容につなげる実践がされています(詳細は2008年実践報告集の特集を参照)。

学級名		活動単位		自治活動	内容
日曜学級	公民館学級	コース制	◆わかそよづくりコース ◆みんなのたいせつな ことばコース ◆ひまわりコース ◆くらしコース ◆ハッピー生き生き！ スポーツコース ◆夢のあかりコース	班長会	各コースの班長・副班長とそれを支援する担当者と構成される学級活動後の会議。年間行事についての調整や班長会ニュースの作成を行っている。
			つどい委員	有志が集まった学級生と担当者数人で構成し、朝夕のつどいについて企画・運営を行う。また合宿・クリスマス会・成果発表会は班長会と合同で運営していた。	
	ひかり学級		◆エクスポコース ◆おまかせ芸術コース ◆レッドスターズ ◆みんなの未来コース	班長会	ひかり学級全体について話し合いをする会議。 合宿・クリスマス会・成果発表会などの行事についてと、コースからの連絡を行った。
土曜学級		班制	◆流れ星🌟ダンス班 ◆スマイルイベント班 ◆ものづくり ブリヂストン班 ◆秋桜班	班長会	各班の班長・副班長とそれを支援する担当者と構成され、成果発表会等の行事や、土曜学級全体について話し合う会議。

第2部 公民館学級

第1章 コース活動

こうみんかんがつきゅう
公民館学級 わかそよづくりコース

かつどう なが
活動の流れ

6月10日	開級式
6月17日	自己紹介
7月1日	係決め、自己紹介
7月15日	今後の活動の話し合い、若葉とそよ風のハーモニーコンサート（以下、わかそよ） についての話し合い
9月2日	過去に行なわれた、わかそよの動画鑑賞、感想について話し合い
9月16日	合宿の話し合い、わかそよの話し合い
10月14日	2グループに分かれての合宿の話し合い、太鼓奏者新倉さんの動画鑑賞、生涯 学習センターまつりの話し合い
10月21日	生涯学習センターまつり、わかそよ実行委員会（コメント会館）
11月4日	石窯ピザづくり、新倉さんのコンサートに参加
11月17日	大地沢での合宿一日目：交流会での発表の話し合い、新曲についての話し合い
11月18日	大地沢での合宿二日目：散歩、歌の練習
11月24日	わかそよ実行委員会（土曜学級）
12月2日	クリスマス会での発表内容の話し合い、クリスマス会の配役決め、わかそよ実行 委員会（ひかり学級）
12月16日	クリスマス会の練習、クリスマス会
1月13日	わかそよ実行委員会（ひかり学級）
1月20日	（午前）新年会、わかそよ実行委員会の内容の共有 （午後）わかそよのテーマについて話し合い、新曲づくり、新曲の練習
2月3日	新曲づくり、新曲の練習、わかそよ実行委員会（公民館学級）
2月17日	新曲の練習、成果発表の内容の話し合い
3月3日	成果発表会

1. コースの特徴

このコースは男性1名、女性8名のメンバーで1年間活動しました。比較的話題に積極的な青年から活動の始まりにコース内の青年たちに対して提案が投げかけられ、それに対してそれぞれが意見をだし合う形で進むような話し合いが活動に多く取り入れられました。

今年度の最初の頃は、コンサートづくりコースの中でも音楽コースとどのように分かれるかという話し合いが行われていましたが、話し合いを重ねるうちに、学級活動を通してわかそよに向けての取り組みたいという青年が多くいたので、音楽コースと分かれることになりました。

2. 活動の様子

(1) それぞれの思いについて語り合う

コース活動の最初の時期には、学級生自身の体験やニュースを通して若葉とそよ風のハーモニーコンサート(以下、「わかそよ」)で伝えたい思いが話し合われました。旧優生保護法についてや、思いが相手にうまく伝わらないことなど内容はさまざまですが、毎回話し合いが活発に行われ、わかそよにむけて青年たちの思いが伺える話し合いとなりました。また、普段の暮らしの中では、青年たちの思いを話し合う場や機会はあまりないので、コンサートづくりコースでは日ごろの生活でのつらいことなど、ニュースでの思いを語る機会が多くありました。この話し合いが、わかそよに向けて青年たち思いの共有につながっていきなりました。(話し合いの内容は次ページ終わり以降に記載されています)

(2) 学級生について

長年、青年学級を支えていた青年が亡くなりました。コースのメンバーは亡くなった青年と、同じコースで活動することが多かった青年たちがいたため、コース活動の中で話し合いをしました。青年が亡くなって感じたこと、他の仲間たちへの感謝などたくさんのことが出ました。

(3) 新曲について

この曲は長年、青年学級を支えていた学級生が亡くなり、その青年への思いを伝えたいということがきっかけでできた曲です。日頃、自分が感じていることや、伝えたい思いについて積極的に意見が出ました。また、作文を書いて自分の辛い思いや生活の中で感じたことを伝える青年もいました。

中には、口では言えないことでも筆談のできる担当者を通して思いを言う青年もいました。歌詞づくりにたくさんの時間をかけて行い、青年たちの気持ちを伝えたい、感じていることを届けたいという思いが見えてきました。曲の題名について話し合い、青年が事前に考えた候補と活動の中で出た意見と合わせて、多数決の結果、「私のきもちを伝えたい」になりました。「私たちの生きている意味をどう伝えたいか」という思いが強くなってできた曲となりました。わかそよでも発表しました。歌詞には青年たちは自分たちの届けたい思い、伝えたいことがたくさん詰まった新曲となっています。(歌詞の話し合いについて3ページ先の(5)に記載されています。)

(4) わかそよ実行委員会の参加

コンサートづくりコースとしてコースの中で参加することのできる学級生でわかそよ実行委員会に参加し、テーマやコースの活動で話し合った

内容をひかり学級、土曜学級の青年たちとも共有をしました。わかそよ実行委員会のある場所によっては、公民館から出向くこともありました。わかそよ実行委員会の話し合いでコンサートづくりコースの中でコースの活動を通して決まったことや案を意見として出たことで話し、自分の思っていることを伝えました。この話し合いであまり自分の意見を言えない青年も、自分の思いを伝え合い、テーマ、構成、ステージで伝えたいことを他の青年たちとも意見を交換する機会となりました。

わかそよについて長い間、青年学級に参加している青年たちからは「これからの世代につなげていくわかそよにしたい」という声が多くありました。次のわかそよに向けての意見を述べる青年もいました。他にも、「今は、いない仲間にもむけてわかそよにしていきたい」という青年の意見もありました。青年たちのわかそよで届けたい思いはより多くの人に自分たちの気持ちや日頃感じていることを伝えていきたいという思いがうかえた有意義な取り組みとなりました。長い時間をかけてわかそよにむけて話し合いを重ねていきました。わかそよ実行委員会の話し合いではわかそよに対する青年たちの思いや伝えたいことは様々ですが、熱い気持ちや観ている人へ何を伝えていきたいのかを共有することで、わかそよに向けてコース活動内での話し合いの内容にもつながっていきました。

3. コンサートづくりコースの展望

(1) コンサートづくりコースのこれからの活動について

公民館学級の中であった青年たちが公民館学級について話し合いで、コンサートづくりコースについての今後について話がありました。自分達の思いを外に発信できる機会が少ないため積極的に外に発信できるコースにしたいという声が青年たちから出ました。この話し合いで出た青年たちの意見を受けて、青年たちの中で話し合いを続け、コンサートづくりを続けていくという方向で決定をしました。名前や活動する内容がどうなるかは未定ですが、例えば、外部のイベントなどに参加し、青年学級の活動、青年たちがどのような思いで曲を作ってきたのかをたくさんの人たちに伝えるコースになる予定です。また、作文や新曲を作りたいという青年もいました。わかそよは2年に1回しかないので、来年はわかそよの開催はありませんが、「次のわかそよに向けての活動も行っていきたい」という青年もいました。コンサートづくりコースでの活動については青年たちの次に活動をつなげていきたいという熱い思いが見えていました。

・コンサートづくりコースの話し合いの記録

(1) わかそよについて伝えたい思いについて話し合いました。(2018. 7. 1)

「今年あった出来事として私が一番気にしているのは優生思想の事です。旧優生保護法のことについて当事者が声をあげたことが私にとって印象的でした。私たちの命の価値について私たちの仲間がついに声をあげたのだと驚かされました。」

「私はもっと、私の命の話をしたいです。私たちが生きていることの素晴らしさがどこにあるのかということが話し合いたいです。」

「私たちの生活が少しばかり辛いことばかりだということ少し伝えたいです。私たちにとってよりよい生活とはどういうものなのかを伝えていきたいです。」

「私は命の価値と感謝の気持ちはイコールではないけれども、私たちの命はいつも軽く見られるように思うのですが、感謝されることがよくあってそういったときはうれしくなります。私たちはそうやって気持ちのやり取りすることで、少し感謝をしたり、そんな中で意味が感じられたりすると思います。」

(2) わかそよをどのようなテーマにしたいかについて青年たちから出た意見があります。

(2018. 7. 15)

「自分たちの言葉や思いと、生きている意味を发表したい」

「生活の中で色々な人に感謝したり、されたりすることを发表したい」

「私たちにも伝えたい気持ちがあることを、まず发表したい。」

「私は人に支えてもらいながら生きていますので、そのことにも感謝をしながらも、私がそれでも生きる意味があるのだということを伝えたいです。私がこうやって話しているときこそ、その意味を感じることができていて、私の話がまた別の人の思いを動かして繋がってできる変化に私は自分が生きる意味を感じるのです。ですので、私たちの言葉とそれを伝える方法を考えて発

表に繋がられたらいいと思います。私たちには思いがあるそれを伝えたいです。」

「私たちの生活はいつも感謝と共感で溢れていますので、生きる意味を感じるができます。ですが、ときには思いが伝わらなかったり言葉がでなかったりしますので、気持ちがないように扱われたり気持ちが伝わらなかったりします。私たちの気持ちはみんなと同じようにあるのに、そのことが伝わらないのが一番大変なのです。ですので、たしかに命の価値とかそのようなことは大切ですが、まずは、私たちにも気持ちがあって、感謝と共感の中にみんなと同じように生活したいということをお伝えたいです」

「私たちの仲間がまるで価値のないように扱われたりすることを聞いたときに、なぜそのようなことが起きるのかと悲しくなります。私たちは自分たちで生きている意味を見つけない。それが私の伝えたいことです」

(3) 楽器・音楽コースとの合同で活動をしました。

前回のわかそよの動画を観て1部のミュージカル、2部合唱について意見や感想が出ました。

(2018. 9. 2)

1部ミュージカル

「見ていくと元気をもらえた気がする」

「私は今回も誰でも共感を与えられるテーマをもとに、私たちのことやほかの困っている人たちのことを伝えていく発信をしていきたいと思っています。」

2部合唱は学級ごとに考えた演出したステージでした。

「やまゆり園のこと。大きな花、みんなが花を持つ

て歌っていたのがよかった。」

「今回のわかそよのステージもあたたかいステージになったらいいな。」

(4) わかよそ実行委員会で参加した青年からテーマについて学級内の活動で話し合っていて欲しいということになり、意見をだし合いました。

(2019. 1. 20)

「テーマはやっぱり「命」という言葉を入れたい。～命あって私たちは輝く～こういうようなテーマはどうでしょう」

「今回のわかそよでも、やまゆり園のことを大きく取り上げられるようになると思います。そうするとやっぱり、命の大切さが伝わるようなテーマにしたいですね。」

(5) 新曲の歌詞の伝えたい思いを話し合いました。(2019. 2. 3)

「私の気持ちはいつも私の中にある、その思いがステージを飾るといいですね。私たちの気持ちはないように扱われてきたからこそ今、この瞬間輝きたいです。命があるから輝く、命の価値を輝かせましょう。いろんな人たちがここに集まって、私の輝きが今見つかります。私たちの命はみんなと一緒に今、ここにあります。」

「僕たちの歴史が、またここから始まって今、次の人たちに伝わっていきます。僕らの言葉はそれだけで意味があるけどもっとたくさんの人に伝わって欲しいです。僕の思いはみんなへの感謝の気持ちです。」

「私のグループホームでの生活は、嫌な気持ちになることもありますが、乗り越えています。ホー

ムで厳しく言われると、ストレスで嫌な気持ちになります。ホームでの生活で心がモヤモヤしています。早く明るくなって欲しいです。」

「私たちの思いは何もないと思われてしまうことが多く、辛いときもありますが、こうやって、私たちの声が人に伝わった嬉しさは、私たちがよく分かっているつもりです。言葉は話す人と聞く人の気持ちがひとつになって初めて伝わります。聞く人みんなに感謝を伝えたいです。」

「私たちの命が、まるで価値の無いように扱われていることを私は感じます。私たちの命が輝く、その場面を私は作り出したいです。命があるからこそ輝ける。私はそのことをずっと言いたいと思って生きています。私の命が輝けるのは、命があるからこそなので、この命を輝かせたいということを広く伝えたいのです。そのために私たちに何ができるのかを考えたいのです。私は言葉には思いがあるということを思っていますが、それよりも何より、私の命が輝くために今、何ができるのかそれだけを考えてステージを作りたいのです。私たちが輝くステージを作りましょう」

(6) 成果発表の内容で「わたしの気持ちを伝えたい」について思いを伝えました。(2019. 3. 3)

「わたしの気持ちを伝えたい」という歌は、私たちの生きている意味を、どうして伝えたいのかが積み重なって誕生した曲です。」

こうみんかんがつきゅう
公民館学級 みんなのたいせつなことばコース

かつどう なが
活動の流れ

6月10日	開級式
6月17日	学級全体でわかそよコンサート・コース編成について話し合い
7月1日	コース内の係決め、コース名決め、自己紹介、歌を歌う
7月15日	今年度やってみたい取り組みについて共有、太鼓に挑戦
9月2日	わかそよコンサートや合宿について話し合い、過去のコンサート DVD を鑑賞
9月16日	歌づくり 感謝の歌をつくることに
10月14日	歌づくり 感謝の手紙を書く
11月4日	合宿の朝食メニュー、コース発表内容について話し合い、 感謝の手紙の中で歌詞になりそうなフレーズの抜粋
11月17日	合宿1日目：朝食メニューの買い出し、コース発表の練習、全体交流会
11月18日	合宿2日目：うたづくり 1番と2番の構成について話し合い、歌を歌う
12月2日	合宿の振り返り、新曲歌詞のたたき台確認、クリスマス会について話し合い
12月16日	クリスマス会の配役決め、コース発表練習、本番
1月20日	わかそよコンサートのテーマについて・歌づくりの話し合い
2月3日	新曲のメロディーについて話し合い、わかそよ実行委員会参加
2月17日	新曲「ありがとうのうた」完成、成果発表会について話し合い
3月3日	成果発表会

1. コースの特徴

男性6名、女性5名のメンバーで活動しました。前年度から楽器・音楽コースを経験してきた青年が6名、他コースから参加した青年が4名、今年度新入の青年が1名でした。学級経験の長い青年と若手の青年が同じくらいの人数で構成されました。

活動内容に関しては、5月の若葉とそよ風のハーモニーコンサートに向けて歌を作っていきたいという青年が多く、楽器を演奏したい、歌をたくさん歌いたいという希望もありました。

2. 活動のねらい

- 話し合いを通して仲間の気持ちを知る、自分の気持ちを仲間と共有する
- 自分たちが何を表現したいのかを考え、仲間とともに一つの形にする
- 様々な人達の前で、音楽を通して自分たちの思いを発信する
- 楽器の演奏や歌づくり・コンサートづくりへ携わることで、新たな経験を広げていく

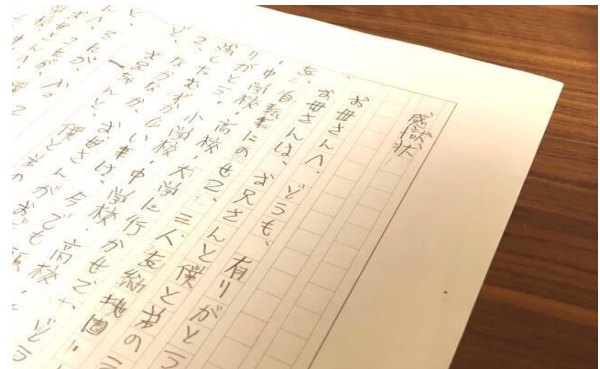
3. 活動の様子

(1) 歌をつくろう

活動当初から多くのメンバーに歌づくりへの強い要望がありました。歌のテーマとして挙げてきたのは「感謝、いのち、家族、仕事のこと」などでした。それぞれのテーマ設定について話をしていくうちに、メンバーに共通していたのが「感謝を伝えたい」や「ありがとう」という思いでした。そのため、テーマを「感謝」として歌づくりを始めることになりました。

(2) 感謝の手紙を書いてみよう

テーマが抽象的なこともあり、いざ歌づくりとなっても、これといった進め方がわからず話し合いは止まってしまいました。そこで、担当者から「感謝を伝えたい人に手紙を書く、というやり方はどうですか」という提案をし、賛同が得られたので「手紙」という手法を用いて歌の素材づくりを始めました。



作文用紙に自分で書く人、絵を描く人、筆談での聞き取りなど、想いの伝え方は様々でした。手紙の相手も、家族や先生、職場の仲間、学級の担当者と幅広いものになりました。絵を描いた青年は、なぜこの絵を描いたのかという想いを完成後説明しました。

手紙の文章を自分で読みながら、笑顔がこぼれる青年もいるほど、手紙や絵にかかれた一人ひとりのエピソードは心温まるものでした。聞いている仲間も笑顔になり、素敵な時間を共有しました。

また、「愛してるよ、ママ」など、日頃は恥ずかしくて出てこない言葉も、不思議と手紙だと書けてしまうもので、完成した感謝の手紙や絵は、相手への愛がたくさん詰まったものとなりました。

「いつか良い歌で感謝の気持ちを伝えたい」と思っていたので、手紙を書いて、それを歌にできて

嬉しいです」と最終日に青年の一人が語りました。

なお、この手紙と絵については、学級ニュースにも掲載しましたが、成果発表会でも一人ひとりが発表しました。手紙を書いた相手が成果発表会に来ていて、感謝のことは直接伝えることができた青年もいました。

(3) 感謝の気持ちから考えたこと

今回、手紙をお母さんに書いた、ある青年。いつも買い物のときには荷物をお母さんが持ってくれていたそう。ですが、手紙を書いた後に「これまでは、お母さんのしてくれることに感謝の気持ちでいっぱいでしたが、私も自立をしていかないといけませんね。今度は私がお母さんの荷物を持ってあげたいです。」と話しました。コースのメンバーが、「いいね!」と応援し、担当者を通じてこれからは自分が持つということをお母さんに伝えました。

しばらく経って、この青年は「荷物を実際に持ちましたよ」と笑顔で仲間に報告しました。手紙を書くことで感謝の気持ちから家族との関係を振り返り、そしてこれからの自分について考えるきっかけになったようでした。

(4) 太鼓に挑戦

青年の中に楽器をやってみたいという希望もあったため、学級にある締め太鼓と宮太鼓を叩いてみることにしました。コースに太鼓のサークルに所属していた青年がいたため、まずは手本で叩くと、その迫力ある音と叩く姿にみんなで感動! 「お〜! すごい!」「カッコいいね!」と盛り上がりました。

簡単なリズムを習い、他のメンバーも挑戦。リズム良く軽快に叩くメンバー、部屋中に響く音に

笑顔を見せるメンバー、カッコいいポーズをきめるメンバーもいて、楽しい時間を共有しました。活動の中では時間の都合上、これ以上取り組みができませんでしたが、「今後、曲に合わせてみたい、練習の工夫をしてやってみたいです」という声もあがりました。



(4) コンサートづくりへの関わり

わかそよづくりコースと合同で活動を行うことも多くありました。わかそよコンサートへ向けての話し合いに関わることとなり、コンサートづくりへ意見を反映させる機会を持つことができました。

特に、みんなのたいせつなことばコースでは、「いのちについてわかそよで伝えたい」という青年がいて、コース内でも共有されていました。そして、「いいいのちとわるいのちとは」「わるいのちなんてない」「いのちはみんな同じいのちである」など議論が発展しました。その中で、「いのちのかずだけことばがある。いのちのかずだけ人生がある。すべてはいのちの数だけ。」といったことばが生まれ、わかそよ実行委員会で提案することとなりました。結果的に、コンサートのテーマは「いのちのかずだけ おもいはある ~みんなちがってもいっしょに生きる~」となりました。わかそよづくりコースとともに活動をすることでコンサートづくりに携わることができ、「コンサートを自分たちで作っていること」そして「自分た

ちが伝えていきたいことは何か、ということ」をより強く実感する機会となったようです。

4. 課題と展望

(1) 感謝をテーマとした新曲の完成

コースの一番の目標であった「感謝の歌をつくること」にじっくりと取り組み、その達成を全員で喜びました。みんなの想いを形にした新曲が、「ありがとうのうた」です。

今回、歌詞のたたき台とメロディーについては、青年が書いた手紙や意見を反映させ担当者らが形づくりましたが、今回の経験を通して、「良い歌になって、嬉しい気持ちでいっぱいです。今度は私も歌を自分でつくってみたいです」と意気込む青年もいました。

今回、歌作りの素材として「手紙を書く」という手法を使いましたが、これにより感謝を伝えたい相手がイメージしやすくなり、また相手に語りかけるように自分が日頃使っている言葉を用いることになるため、より青年の言葉が引き出されやすくなりました。今回のテーマに適した手法となったように思います。相手との親密な関係性も文章から見えてくるため、家庭などが学級以外の場所での青年の表情も感じとることができました。

そして何より、手紙から歌詞がつくられ、それぞれのエピソードが入った歌になったことで、メンバーが描いていた「より自分たちに近い存在のうた」「みんなの心にしみ込んでいくうた」となりました。これからも感謝を伝える学級ソングとして歌い継がれていくことを期待します。

(2) みんなのことばをたいせつに

歌づくりの過程で大切にすることは、筆談で語る、選択肢の中から選ぶ、自分で話す等、青年それぞれが必要としている方法で意見を話し、一人ひとりの意見を反映して活動を進めるということです。

班長が不在の際は担当者が進めたり、活動の様子を見て、担当者がアイディアを出したり選択肢の提案をすることもありましたが、基本的な進行や最終的な判断はすべて青年が行いました。全員が意見をじっくり話して進めるということは、時間はかかるものですが、その分丁寧に活動をつくっていくことができました。活動最終日には「みんなとのんびり歌を作ってこられてよかったです」「このコースはどんなときもゆったりとした空気感で進んでいましたね」と青年が活動を振り返りました。

コース名どおり、「みんなのことばを大切に」にして活動できたコースでした。

(3) 活動の素材について

手紙を書くことから歌づくりに広げていくという素材は良かったのですが、時間的に他の素材へ取り組むことができませんでした。今後の楽器・音楽コースにおいては、スケジュールに余裕を持って歌づくり以外の時間も確保し、歌が完成した後は楽器で演奏をつける等、活動の幅を広げていきたいと思っています。





— 感謝の手紙 (抜粋) —

<お母さん、お父さんに向けて>

「感謝状」

お母さんへ、どうもありがとう。
お兄さんと僕とお弟の3人を自転車に乗せて、
3人を幼稚園・小学校・中学校・高校・大学に
行かせてくれて、どうもありがとう。
勉強したむずかしいことは、
今でも頭の中に入っています。



悩んだこともありましたが、お母さんがいてくれ
たから頑張ることができました。
今度はお母さんを支えたいと思います。
大変な買い物や洗たくを毎日やっている
お母さんを見て、いつもありがとうと思っていま
す。いつもおいしいごはんを食われて、私は幸
せです。これからも愛しています、ママ、毎日あ
りがとう。愛してるよ、Yより。



お母さんはいつもAちゃんのことを考えて、
階段だったり、足場の悪い所を通らないように
してくれます。いつもありがとうと言いたいで
す。あんなに愛してくれる人は
お母さんしかいないと思うからです。
Aちゃんは、これからもお母さんと
一緒にくらしていきたいです。
そして、一緒にたくさんお出かけしたいです。
そして、たくさん愛していると言いたいです。
Aちゃんより。

お父さんいつもありがとう。
名前を呼ばれるたびに、愛されていることを痛感し
ます。

いつもありがとう、お母さん。私はあなたの子ども
に生まれてこれてよかった。

お母さんへ 本を買ってくれること みかんの皮
をむいてくれること 感謝しています。

<担当者に向けて>

いつも送ってくれるTさんに感謝しています。
送ってもらわないと、学級に來れないからです。
他の担当者の方も、みんなのためにしてくれてい
ます。ありがとうございます。

<先生に向けて>

僕が今こうして太鼓を続けていられるのは、
高校の授業で先生に太鼓を教してもらったから
です。高校を卒業してからも太鼓をやりたいと
思い、太鼓のチームに入りました。
すごく楽しいです。ありがとうございます。

<職場の仲間に向けての絵>



職場で使う道具や育てている花を描きました。
みんなで働くことが楽しくて、いつも感謝しています。



ありがとうのうた

2 C G C C E G F C C G C C

1. あはたにおくる かんじじょう たいせつな せつ せつ せつ せつ せつ せつ せつ せつ
 2. あはたにおくる かんじじょう たいせつな せつ せつ せつ せつ せつ せつ せつ せつ

8 A G C F G E F E C

かままし た えいほう (ごほう) の おいしなさん ぼくさんまはたし かんじじょうへ
 たにの たのしみ おいしなさん かんじじょうへ かんじじょうへ
 かんじじょうへ かんじじょうへ かんじじょうへ かんじじょうへ

14 F G E F G C F E

あはたのこどもに ころをあげて くれ くれ くれ くれ くれ くれ くれ くれ
 かんじじょうへ かんじじょうへ かんじじょうへ かんじじょうへ かんじじょうへ かんじじょうへ

20 F E F G C F E F E

あはたのこどもに りまねてくれた いーにびー いたーにびー たはたのこどもに
 たはたのこどもに りまねてくれた いーにびー いたーにびー たはたのこどもに

25 F G C G C F E F G C

おどかしい たまねてくれた たにに あいさせようこと かんじじょうへ ありーおー
 おどかしい たまねてくれた たにに あいさせようこと かんじじょうへ ありーおー

31 F E F E D C

あいしてる まわりをたたくこと せつせつせつせつ

こうみんかんがつきゅう
公民館学級 ひまわり(ものづくり)コース

かつどう なが
活動の流れ

6月10日	開級式
6月17日	自己紹介、今年の目標、コース名決め(ひまわりコース)
7月1日	係決め、看板作り、七夕飾り作り
7月15日	近況報告、ペットボトル工作
9月2日	夏休みの思い出、合宿の話し合い、国際版画美術館の市民展の見学
9月16日	調理(焼きそば、フルーツポンチ)、粘土工作
10月14日	合宿の話し合い、粘土工作
11月4日	合宿の話し合い
11月17日	合宿1日目：朝食の食材の買い出し、相模原麻溝公園へ外出
11月18日	合宿2日目：朝食作り(サンドイッチ、ポテトサラダ)、落ち葉で作品作り
12月2日	合宿の振り返り、クリスマス会の話し合い、成果発表会の話し合い
12月16日	クリスマス会(合宿で作った作品の発表)、年明けの活動の話し合い
1月20日	近況報告(冬休みの思い出、新年の目標)、フィンガーペイント
2月3日	調理(ラーメン、チャーハン、餃子)、フィンガーペイント
2月17日	テロ災害合同訓練の見学、成果発表会の練習
3月3日	成果発表会

1. ひまわりコースの特徴

今年度の「ひまわりコース」は、男性8名で活動しました。昨年度から継続して所属するメンバーも含め、新たに2名がものづくりコースに加わりました。例年、1年を通し様々なものづくりを行います。が、「調理をしたい」「公園へ行きたい」などの意見が年度当初から多くあがりました。活動内容についてはメンバーで話し合いを重ねて決めていきました。

年度終わりの成果発表会に向けては「みんなで一つの作品を作りたい」という意見が多くあがり、コース名であるひまわりの絵をメンバー全員で作ることができました。またひとりひとりの作品をメンバーに紹介する時間もあり、1年間を通して様々な活動ができました。



2. 活動のねらい

- ・互いの意見を認め合いながらオリジナルの作品を作り上げる
- ・仕事を含む日常生活での出来事や思いを共有し、創作活動へつなげる
- ・個性を大切にし、それぞれの表現の方法を

尊重する

- ・1年を通じて仲間との創作活動時間を共有し、ものづくりの楽しさを共有する

3. 活動の様子

(1) 話し合いから出た取り組み

ものづくりコースには長くものづくりに在籍している青年が多くいました。青年の意見を取り入れた活動をするため、午前中は話し合いが多く行われました。その中で、「調理がしたいです」「版画美術館へ行きたいです」「電車とバスで出かけたいです」などの意見があがりました。また、青年が職場で取り組んだというペットボトルを使った工作の話題になり、その日の午後の活動に早速取り入れました。話し合いの中で出た意見をコースみんなで共有した活動ができました。

① センター祭りへの出展

10月に行われた生涯学習センターのセンター祭りに公民館学級として作品を展示しようという話題になり、「紙粘土で好きなものを作りたい」という意見を取り入れました。青年がそれぞれテーマを決めて作品作りに取り組み、3日間展示がされました。11月の合宿では他のコースの青年に向けて作品のテーマを発表しました。近い距離で



はありましたが、自分たちの作品を外に向ける事ができました。



② 外出

年度当初から「外出がしたいです」「みんなで電車やバスを使って外へ出たい」との声が多くありました。そんな中、「コースでの創作活動に生かしたい」という意見から、市内の国際版画美術館の市民展（絵画や写真、陶芸）などの見学に出かけました。「電車の写真が良かった。いつか写真もやってみたい」「富士山や海、紫陽花の花の絵がきれいだった。ひまわりの絵が印象的だった」などの感想があがり、外部の作品を見たことで色づかいや風景の鮮明さを感じる事が出来ました。そしてその日は「喫茶けやき」で昼食をとり、数少ない外食タイムをみんなで過ごしました。



また、合宿の初日には「公園に行きたい」「アスレチックがしたい」との意見から、相模原麻溝公園へ出かけました。



公園ではふれあい動物園、アスレチック、展望台見学など普段とは異なる活動ができました。また、事前に「公園で拾った落ち葉で作品を作りませんか」との提案があり、合宿2日目にはそれらを用いて合宿の思



いで 作品で 表現 しました。その 作品は クリスマス 会で 他の コースの 青年に 紹介 しました。

③ 調理活動

調理活動は合宿も含めて3回取り組みました。メニューは多数決を取り、9月には焼きそばとフルーツポンチ、合宿ではサンドイッチ、2月にはチャーハンとラーメン作りを行いました。9月と合宿時の活動では数人で具材の買い出しから始めましたが、2月の調理では出来合いのチャーハン、ラーメンに自分たちの好きな野菜を追加することなどを行いました。「みんなで作れて楽しかった」「今年からのメンバーと調理ができてよかったです」など感想が話され、青年からあがったメニューを一通り作ることもでき、重要な活動内容となりました。また、調理活動により余った昼食代で年度末にはみんなで取り組んだフィンガーペイントのクリアファイルを作成して、ひまわりコースの思い出の作品を手元に残すことができました。

④ フィンガーペイント



年末に成果発表会で何を発表するかという話し合いの中で、「みんなでひとつの作品を作りたいです」と多く意見があがりました。新人の青年も含め、合宿を機に作品づくりに用いる色が増えたこと、前年のものづくりコースがパフォーマンス書道を行っていたことから、たくさん色を使える「フィンガーペイント」に取

り組みました。作品のテーマには「コース名のひまわりを描きたいです」「発表の時には世界に一つだけの花を歌いたいです」と話され、「世界に一つだけのひまわりコース」として全員でテーマに向けた作品作りを行うことができました。

作品は、溶かした小麦粉に絵の具を混ぜたものを手や指につけて、半紙に伸ばして描く方法を取りました。大きな半紙にダイナミックに色を重ね、手が汚れることを遠慮するメンバーはクレヨンやペンで細かい部分を描き、それぞれが思い思いの色を使い空に浮かぶひまわりの絵が完成しました。



「自分達で作ったとは思えないくらいすごい作品
ができました」と話があがるように、1年間の
活動でも印象に残る内容になりました。

また、この作品が第19回若葉とそよ風のハーモ
ニーコンサートのポスター素材として使用された
ことで、青年学級を越えた方々にも自分たちの
作品や活動を伝えるきっかけになりました。また、
「ひとつの作品を全員でつくる」ことで青年同士
が作品を描きながら話す姿などが見られ、自然と
仲間意識も生まれたのではと思います。



⑤ 成果発表会

成果発表会ではスライドに合わせ1年間の
活動を紹介し、各自の感想も併せて発表しまし
た。フィンガーペイントの絵をつるし、「クレヨン
でチューリップを描きました」「家族に伝えたいで
す」「水色で空をイメージして描きました」と思い
思いの感想を伝えました。また、振り付け付きの
歌で「世界に一つだけのひまわりコース」という
テーマを伝えることができました。

(2) 青年同士の関わり

男性8名のうち、学級歴の長い青年が6名、
若手の青年が2名という構成でした。ものづくり
という個々の創作活動になりがちですが、活動
のねらいである「互いの意見を認め合いながらオ
リジナルの作品を作り上げる」という点は、互い
の作品をテーマとともに発表しあう時間を設け
た事で達成できたのではと思います。

また合宿では、若手の青年に「初めての合宿は
どうでしたか」「また来年も一緒に行きましょう」
などと話し掛け、学級歴の長い青年がコース活
動をリードする姿が見られました。

(3) 担当者の役割

コース活動では青年の意見を聞き、話し合いを
重ねて活動を進めていきました。例えば外出とい
う声があがった時、担当者では実現させるために
どこが妥当か、全員の希望に合う施設はどこか、
行き方などを慎重に話し合いました。結果、国際
版画美術館の市民展が活動日に開催されていた事、
相模原麻溝公園にアスレチックや展望台がある事
などの情報共有ができ、青年に提案する事がで
きました。青年の意見を活動に反映させられるよ
う、担当者それぞれの話題や情報提示が必要だと
感じました。

4. 課題と展望

1年間の中で、調理は合宿も含め3回、外出2
回、年明けからは全員で一つの作品に取り組むな
ど、青年からあがった意見を反映させながら多く
の活動ができました。

しかし、活動内容を話し合い、ものづくりや調

理を開始するという流れが多く、青年の仕事のこ
とや近況報告など、それぞれの話をすることが
少なくなりました。1年間同じコースの仲間とし
て活動するという事は、活動以外でも普段の思い
や悩みを共有する事も大切です。コースの基盤は
「ものづくり」ですが、今後はそういった話し合
いの場を設ける事も必要です。

また、外出には国際版画美術館、相模原麻溝
公園に出かけ、青年からも「みんなで行ってよか
ったです」「1年のうちで一番の思い出です」など
の意見があがりました。絵や写真の鑑賞、素材集
めを外で行うことで、その後の作品づくりに活か
せることが多かったのではと感じます。しかし、
「地域・外部との交流」という点では活動に反映
させることが少なくなっていました。例えば、
他団体のものづくり教室に参加する、自分たちの

作品を作品展などへ出展する事などがあげられ
ます。そのような取り組みの参加へは、やはり
担当者が日頃から情報収集に努める必要があ
り、今後の課題です。



こうみんかんがつきゆう
公民館学級 くらしコース

かつどう なが
活動の流れ

6月10日	開級式
6月17日	「コンサートづくりコース」について 「ひとつのいのち」を歌う
7月1日	自己紹介 コース活動の方向性について
7月15日	見学者に自己紹介 調理実習（お好み焼き） 次回の活動について
9月2日	活動の振り返り 近況報告（夏休み） 合宿について 職場見学について
9月16日	職場見学について 生涯学習センターまつりで歌う曲について
10月14日	ダリア園（かがやき）見学 合宿について
11月4日	ダリア園見学の振り返り 合宿の発表について 働くことについての作文
11月17日	合宿1日目：朝食の買い出し 交流会で作文と「いつまでもともだち」の発表
11月18日	合宿2日目：朝食づくり JAXAと相模原市立博物館の見学
12月2日	クリスマス会の発表について 合宿の振り返り
12月16日	パン作りの話し合い クリスマス会の発表の準備 クリスマス会
1月20日	パン作り お互いの作文の発表 成果発表会について
2月3日	近況報告 仕事についての話し合い 成果発表会について
2月17日	成果発表会で発表する内容の確認 うたの練習
3月3日	成果発表会

1. 集団の特徴

メンバー構成としては、全員が前年度くらしコースに参加していた男性が9名。さらに全員が、

学級経験の長い青年で構成されています。少人数で落ち着いていて、長く歩けない青年が1名、車イスの青年が3名いるため、外出は人手を要しますが、青年学級での経験が豊富なため、様々な活動に取り組みやすいメンバー構成でした。

昨年のくらしコースで活動への意見を積極的に述べて引っ張ってきた青年が、今年度は数名が他のコースへ移りました。話し合いでは5名が主に自分の言葉で発言し、4名が主に筆談（介助付きコミュニケーションの手法）を用いて発言していました。

活動内容に関しては、仕事や生活のこと、なくなった仲間のこと、「津久井やまゆり園」の事件のことについて考えていきたいという意見が出され、翌年5月の「若葉とそよ風のハーモニーコンサート」で何を発信していくかということについても高い関心を寄せていました。

短期入所やグループホームの利用状況から、欠席が多くなる青年が2～3名いました。

2. 活動のねらい

活動の狙いは以下の3点です。

・仕事やくらし、仲間のことに関する話し合いや作文を書くことで、自分たちの想いを伝え合い、互いの想いを共有する。

・職場やグループホームの見学や、料理などの活動を通して生活や仕事の中の楽しさや豊かさを見つめ直す。

・作文などの自分たちメッセージを社会に対して

発信することで、自信を持って生活していく力を身に着ける。

3. 活動の様子

(1) 仲間づくりと発言の様子

今年度のくらしコースの活動は、話し合いと作文を書くことをベースにして活動してきました。その間に、仕事についての話し合いから職場見学としてダリア園に出かけたり、パンの販売をしている仲間の発言からパン作りをしたりするなどの活動を行ってきました。

また、活動の区切りには、作文を書くことが習慣化し、作文を読みあうことで仲間との関係も深化してきたように思います。

話し合いは自分の言葉で話し言葉で伝えることが得意な一般就労をしているAyさん、パンの販売が好きなIsさん、複数の職場の経験を持つYkさんから進んでいきました。

仕事中の事故で車イスに乗るSkさんも積極的に発言し、中学卒業時から青年学級に参加しているSmさんも言葉数は少ないものの話し合いには積極的に参加していました。

ダリア園を運営する職場で働くMmさんも質問に対して的確に意思を示し、必要な場面では筆



談^{だん}が発言^{はつげん}していきました。ベテランで最近^{さいきん}グループホームで暮らし始めた^{はじめた} Ks さんは、自分で^{おこな}行う意思^{いし}表示^{ひょうじ}を大切に^{たいせつ}しているので筆談^{ひつだん}を多用^{たよう}はしません^しが、Ks さんの意見^{いけん}を聞き^きたいときに声^{こゑ}をかけると、筆談^{ひつだん}でベテランらしいグループをリードする^{はつげん}発言^{はつげん}をしていました。

20代^{だい}で車イス^{くるま}に乗^のる Fg さんは、意見^{いけん}を声^{こゑ}や拍手^{はく}、体^{からだ}の動き^{うご}を使って^{つか}かなり適切^{てきせつ}に表現^{ひょうげん}し、まとまった意見^{いけん}などを聞^きくときに筆談^{ひつだん}を利用^{りよう}していました。ベテランの Mm2 さんは、車イス^{くるま}での活動^{かつどう}が連続^{つづ}くと疲^{つか}れてしまい、日中^{にちちゆう}に目^めをつぶることもありましたが、質問^{しつもん}に対して手^てをあげたり、表情^{ひょうじ}を使って^{つか}コミュニケーションをとったり、筆談^{ひつだん}でも意見^{いけん}を伝^{つた}えていました。

(2) 取り組んだ活動

① 職場^{しよくば} (ダリア園^{えん}) 見学^{けんがく}



コース活動^{かつどう}の中間点^{ちゆうかんでん}で行^{おこな}った「ダリア園^{えん}」外出^{がいしゅつ}は、きれいに咲^さいたダリア^みを見^みられただけでなく、仲間^{なかま}の職場^{しよくば}を訪^{たず}ねるとい^{おお}きな意味^いがありました。「ダリア園^{えん}」では、たくさん^{ひと}の人が見^みに訪^{おとず}れるダリア^{そだ}を育て^{そだ}ていることを誇^{ほこ}りに思^{おも}う松井^{まつい}さんに、仕事^{しごと}について話^{はなし}を聞^きくことができました。鮮^{あざ}やかなダリア^{はな}の花^{はな}と共に、一年^{いちねん}の活動^{かつどう}を振り返^{かえ}るうえでも彩^{いろど}りのある大切^{たいせつ}な活動^{かつどう}となりました。

仕事^{しごと}に誇^{ほこ}りや喜び^{よろこ}を感じ^{かん}ている Mm さんの発言^{はつげん}を聞^きき、その後^{ごのち}の振^ふる舞^まいや表情^{ひょうじ}を改^{あらた}めて見^みつめ直^なすと、ふとした瞬間^{しゅんかん}に落^おち着^つきや尊^{そん}厳^{げん}を持^もった壮年^{そうねん}の姿^{すがた}を伺^{うかが}うことができました。

② 調理実習^{ちようりじっしゅう}

前期^{ぜんき}から行^{おこな}ってきた調理実習^{ちようりじっしゅう}も、コースに弾^{はず}みをつける活動^{かつどう}として定期的^{ていきてき}に取り組^とみましました。お好^{この}み焼^やきづくり、合宿^{がっしゆく}での朝食^{ちようしゆく}づくり、生地^{きじ}から作^{つく}るパンづくりと3回^{かい}行^{おこな}いました。



特に最後^{とく}のパンづくりは、Is さんがパンを販^{はん}売^{ばい}していること^{こと}や Yk さんの職場^{しよくば}でパンを作^{つく}っていること、Sm さんからパンを作^{つく}りたいとい^{いけん}う意見^{いけん}があ^あがったこと^{こと}からスタート^{スタート}しました。

パンづくりは、粉^{こな}を混^まぜて生地^{きじ}をつくり、一次^{いちじ}発酵^{はつこう}の後^{あと}に成^{せい}形^{けい}し、二次^{にじ}発酵^{はつこう}から焼^あき上^あがりまで自分^{じぶん}たちの手^てで行^{おこな}い、本^{ほん}格^{かく}的なパン^{てき}を作^{つく}りました。普^ふ段^{だん}は完^{かん}成^{せい}品^{ひん}しか手^てにしな^いいパン^いを一^{いち}から作^{つく}ったこと^{こと}で、Fg さん^{さん}も、パン^{ぱん}作り^{つくり}を仕^し事^{ごと}としてとらえ



発言をするなど、楽しみとしての調理から、仕事や生活の豊かさを自分たちの手に取り戻す活動になりました。



④ JAXAと相模原市立博物館へ

大地沢青少年センターに合宿に行った2日目は、JAXAと相模原博物館に外出しました。室内での活動が多いコースなので、合宿と併せて良い気分転換と社会科見学になりました。特に車イスに乗る Fgさんと公共交通機関を利用して外出したことは、特別な気分の高揚がありました。



⑤ 成果発表会で自分の思いを伝える

合宿の交流会のコース発表、クリスマス会のコース発表、成果発表会と、発表する機会があるときは、コース内の話し合いを重ねた上で作文を書き、発表していました。歌も昨年のくらしコースで、青年学級のリーダーの一人であった茂垣正子さんが亡くなったことを契機としてできた

「いつまでもともだち」というオリジナルソングを欠かさず発表し、クリスマス会からは「わたしのしごとのうた」を加えて発表していきました。



♪いつまでもともだち

- ここにあなたのいすがある
でもここにあなたはいない
今ぼくたちにはこのいすに
すわってるあなたが見える
だからぼくたちはこのいすを
けっしてしまうことはない
あなたとずっと友だちだから
あなたも友だちでいてほしい
- ここにあなたの道がある
でもここにあなたはいない
今ぼくたちはこの道を
あなたとともに歩いていく
だからぼくたちはこの道を
けっして見うしなうことはない
あなたとずっと友だちだから
あなたも友だちでいてほしい

書いた作文をすべて集約できませんでしたが、印象的な作文を数多く書きました。Skさんの長

編の作文は、20代に巻きこまれた交通事故から始まる自叙伝風の文書でした。重要な事実を淡々と語る場所を担当者が聞き写しました。様々な感情が去来する事故からこれまでの時の流れを作文という形で切り取りました。

また、班長のAyさんが成果発表会でコースを代表して書いた作文は、一年間で語られた仲間の思いを包括するメッセージ性に富んだ内容でした。

コース活動では、仕事のこと、生活への思い、そして失われた仲間や亡くなった友のことを語り合ってきました。Ayさんの中では、障がいや差別、いのちの問題を常に真剣に考えていた亡くなった仲間たちへの思い、自ら命を絶った友人への思い、そして尊い命を奪われた「津久井やまゆり園」の仲間への思いを自分の言葉で、しっかりと文章にまとめました。

Ayさんの作文は、亡くなった仲間たちの思いと響きあっているように響く印象的なメッセージとなりました。

また、最後に発表したのは、グループホームを利用する都合で活動を欠席することが多かったKsさんが成果発表会に向けて書いた作文でした。Ksさんの長年の友人で、青年学級のリーダーの一人であった故人の杉本好郎さんが、演劇やダンスを通して仲間の心に届けていたやさしさと明るさをみんなに伝える内容でした。当事者としてしか伝えられない暖かさをもって書いていたのが印象的でした。なお、Ksさんの作文は、筆談で担当者が聞き取って書きました。筆談で聞き取る時にKsさんは、大きくうなずきながら肯定の声をあげていました。

4. 課題と展望

作文を中心に活動を進めるときに、一人ひとりと向き合えば充実した作文が生まれるのでしょうか。例えば過去の交通事故の経験を作文につづったSkさんは、もう少し時間をかけて過去から現在へ、そして将来への展望に筆を進められたでしょうか。

もしかしたら、一人で書き進めることを急いでも、あまり意味がないのかもしれませんが。それぞれの仲間の作文が充実していたのは、仲間と共に話し合い、経験し、書きあい、読みあったからだと考えています。古くは生活綴り方で子どもたちが生活を見つめ直す中で自分の思いと社会を活写したように、現在では識字教育の場や夜間中学などで学びあいながら、その学びが社会を照らすように実践は進んでいくものなのかもしれません。

そこには、様々なことを話し合える仲間の存在がとても大切です。障がいがある当事者は、社会や生活の中で、常に差別にさらされて生きています。実は、自分の思いを語ることや意思を正しく伝えることはとても困難です。その仲間の思いを引き出すためには、真剣に語り合える仲間の存在や自由に話せる場がとても重要なのです。

また、今後さらに、活動を進めるために、学びを深めるための素材の提供を行っていく必要があると感じています。青年学級での学習で、様々な社会の問題や本物の文化と出会い、丁寧に向き合うことができれば、さらに豊かな文化を障がいがある当事者が発信していけるのではないのでしょうか。

いつまでも友だち

C Am Em
 こ こ に あ な た の い す が あ る
 こ こ に あ な た の い み ち が あ る

Dm7 G7 F G7
 で も こ こ に あ な た は い な
 で も こ こ に あ な た は い な

C C
 い い い ま ほ く た ち に は
 い い い ま ほ く た ち に は

Am Em Dm7 G7
 こ の い す に ー す わ っ た る と
 こ の い す に ー す あ わ っ た と

F G7 C
 あ な た が み え る
 あ と も に あ ゆん で い る

Am F E7
 た か ら ほ く た ち ー は こ の い す き
 た か ら ほ く た ち ー は こ の い す き

Am F G7
 け っ し て し ー ま ー う こ と は な い ー
 け っ し て み う し な ー う こ と は な い ー

F Am Dm7 G7
 あ な た と す っ と ー と も た ち た か ら
 あ な た と す っ と ー と も た ち た か ら

F Am G7 C
 あ な た も と も た ち で い て ほ ほ し い
 あ な た も と も た ち で い て ほ ほ し い

こうみんかんがっきゅう
公民館学級 **ハッピー生き生き！スポーツコース**

かつどう **なが**
活動の流れ

6月10日	開級式、話し合い（学級全体で、コンサートコースについて）コース決め
6月17日	話し合い（学級全体で、コンサートコースについて）コース決め、話し合い
7月1日	話し合い、制作（短冊に思いを書く、ゲームカードづくり）話し合い、ボッチャ
7月15日	話し合い（コース名について確認）ゲーム、話し合い（今後の活動について）
9月2日	話し合い（合宿キャンプファイヤー、次回の外出、夏休みなど近況報告）外出
9月16日	外出（相原界限）話し合い（外出の思い起こし、合宿について）
10月14日	話し合い（係の確認、合宿について）ボッチャ、話し合い（合宿の確認）
11月4日	応援担当者に自己紹介、話し合い（合宿の発表について）制作、発表、ゲーム
11月17日	合宿1日目：かしのき山ウォーキング、合宿合流、コース発表
11月18日	合宿2日目：草戸山ハイキング、調理活動
12月2日	話し合い（合宿の思い起こし）制作（お礼の手紙）話し合い（クリスマス会）
12月16日	制作（めくり作制・発表の絵を描く）発表
1月20日	話し合い（見学者へ自己紹介、正月からの近況報告）ウォーキング、話し合い
2月3日	話し合い（成果発表会）外出、豆まき
2月17日	話し合い（成果発表会台本作り、当日役割）練習
3月3日	成果発表会練習、お茶会、成果発表会参加、

1. 集団の特徴

「身体を動かしたい」「どこかへ出かけたい」「健康になりたい」「スポーツをしたい」という20歳代4名、40歳以上4名の男女が集まりました。1名土曜学級からベテラン学級生が移動してきましたが、その他の学級生は、全員が健康コース経験者です。グループホームで生活している学級生が2名、家庭で生活している学級生は7名。そのうち2名は週に一日から二日、グループホームにショートステイしています。

ベテラン学級生がリードする発言に「どうですか」と担当者が投げかけると他の学級生も意見を出すなどゆったりとした雰囲気での活動でした。土曜学級から移動してきたベテラン学級生のユニークな発言が活動の中で、良いエッセンスとなっていました。

2. 活動のねらい

一昨年までのフットベースボールやボッチャで「打倒、ひかり学級！」と掲げてきた、強い要求はなくなり、健康からだづくりコースの軸となるものが変化してきました。そこで、学級生それぞれが、このコースで何がやりたいのかを明確にしていく必要があります、コース名を決めるときに丁寧に話し合っていました。スポーツ全般を楽しみたいという要求、また、少しの時間でも健康のために近隣を歩きたいという要求が多くあり、今年度の活動の大きなねらいとなりました。

- ・いろいろなスポーツに積極的に参加することや、近隣のウォーキングを短時間でも行うことで運動をすることに興味と関心を持つと同時に体力を増進して気力を高めていく。
- ・健康を維持するために自らの健康法を話したり、

資料を見たりして、健康について関心を持つ。

- ・コースの中で一人ひとりが役割を分担して活動する中で、互いの存在を認識し、仲間づくりにつなげていく。
- ・自己紹介、近況報告などの話し合いを通して仲間の生活を知り、自分の生活を伝えることで自身の生活を見つめ直すきっかけを作る。
- ・昨年から取り組んだボッチャをさらに楽しんでいく。昨年経験していない学級生にルールなど伝えていく。また、独自の練習やルールも考えるというねらいで活動をスタートしました。

3. 活動の様子

(1) 話し合い

① コースの名前を考える話し合い

「健康」のイメージは？の問いかけに、「ハッピーがいい」「いきいきしている」「生き生きの漢字がいい」「元気」「スポーツをしたい」と、それぞれの発言がありました。そこから出てきたコース名の意見は、ハッピーコース、生き生きコースけんこう元気コースと発言が上がりました。その意見を総合して「ハッピー生き生き！スポーツコース」と全員が納得したコース名が決まりました。

② 健康について話し合う

今年度の活動日の前半は、異常な暑さの中で行われました。健康を考えるコースとして熱中症について話題が出ました。熱中症にならないよう気を付けようと「前に健康コースで、熱中症予防ドリンクを作って公園で運動中に飲んだね」と経験の長い学級生が具体的に入れた食品を挙げながら話しました。また、自分の健康管理はどう行っているかをテーマに話し合いました。そこから、健康診断の話合いになりました。「月に2

回、歯の掃除に行っている」「お母さんと検診に行く」「職場でやっている」「職場で誕生日が来たらやります」皆さんほぼ、身長、体重、尿を採る、血液検査、X線を行っているということでした。

後に、この活動のニュースを見た家族に勧められ、健康診断に行ったことを「12月に誕生日祝いをしてもらいました。初めて健康診断を受けに行きました」と近況報告の中で話した学級生がいました。学級ニュースに書いた活動の事柄を、家庭でも参考にし、学級活動を、生活の中に取り入れていたことがわかり、話し合いの活動の意義を感じました。

③係決め

班長3名、副班長2名の立候補がありました。それぞれの仕事の内容を挙げていき、帰りの集いに参加後17時までの班長会に参加できる、できないという話し合いの結果、班長会に参加できるメンバーと活動中頑張りたいメンバーの2人体性で行っていくことになりました。

(2) ウォーキングからハイキング、山登り



開級式から、前期4回目の活動で、話し合い後、恩田川を渡った先のかしのき山へ外出しました。目的地まであと15分というところで雨模様になり引き返しました。2時間ほ

どウォーキングをし次回の足慣らしを行うことができました。

話し合いの時、「アイスクリームを食べたい」と

言っていた仲間のために閉店が決まっていたアイスクリーム工房へウォーキングする計画ができ、途中スポーツもしながら、往復4時間、初秋の相原界隈を歩きました。

2年前、高尾山に登った経験者から、再度ハイキングの活動を行いたいという要求が多く出ていました。合宿では、



9月に途中雨が降ってきて引き返した、かしのき山ハイキングのリベンジを行うことになりました。

朝の往路では、「かなったね!」と嬉しそうに語る学級生や「やまのぼり!」と日頃ほとんど発言しない学級生の生き生きした発言は、歩いたことのないこれから先の続く道への期待感にあふれていました。2日目の草戸山ハイキングでも、峠までのちょっと急な道を緊張して登り、やっと頂上に着いた時は皆、達成感に満たされた表情でした。

(3) スポーツ

①相原中央公園での活動

相原界隈のウォーキングにて立ち寄った公園で、ラジオ体操第1を行った後、





スポーツを 30分ほど
楽しみました。「公園で
やったバドミントンは
楽しかった」「フリスビー
をやりました」「暑か
ったけど頑張りました」

「バドミントンしました」「フリスビー、バドミントンやって楽しかった」「アスレチックやった」「アスレチック、フリスビー」(ベンチに座り、3メートル程前の担当者に投げるといいう学級生が考えたやり方)と、それぞれが好きなスポーツを十分楽しみました。

② 凧あげ

正月明けの学級日に、近況報告などの話し合い後、近隣の芹ヶ谷公園へ、ウォーキングにいき、公園で凧あげをしました。ちょうど凧を受けて高くあがり、各自が懐かしい体験をしました。



③ ボッチャ

昨年度盛り上ったボッチャは、話し合いの合間に投げる練習として行いましたが、実際にはコートを作って対戦することはできませんでした。当初、要求が出ていた活動でありながら実践の活動につながりませんでした。

④ ゲームで対戦

一定時間、2色の紙をひっくり返し、色の多さ

を競う、ゲームを楽しみました。

自発的に笛を持ってきて、笛を吹き、スタートと終了の合図を行う役目を行う学級生もいました。「もう1回やろう！」その後トーナメントで5回戦やり終了後「おもしろかったね」と皆、汗を拭きながら話していました。話し合いの合間に行った簡単なゲームで「ハッピー生き生き」を実感できた活動でした。

(4) 合宿の調理

2日目の昼食調理について、話し合いでしたが、2日間とも、ハードな活動ですので、栄養を付けたメニューを考えることを担当者が提案しました。プルコギ風豚丼のほか、味噌汁を具だくさんにし、豆乳汁を作ることに決まりました。具を何にするかでは、白菜、人参シイタケ、ネギ、豆腐があげられました。「シイタケは副班長の職場のシイタケを頼もう」「マスクをした方がいいかな」と経験豊富な学級生たちの貴重な発言もありました。「白菜、大根を切った」「玉ネギの皮をむいた」「玉ネギ、パプリカ、ピーマン、シイタケ





を切ったり肉と野菜をまぜあわせた」「白菜をちぎった」「リンゴの皮をピーラーでむいた」「食器をそろえた」「味見をした」「箸を並べた」「ミニトマトを半分はんぶんに切った」など家庭やグループホームでは、

行く機会が少い調理活動ができました。

分量や手順を確認し、全員参加の調理活動で、

「おいしかった!」と好評で大満足でした。

班長の学級生は「調理をみんなでやったね、栄養満点だったね」と思い起こしの時、印象を語っていました。そして合宿1日目の夕食のカレーライス作りをしてくださった「町田市退職者会の方たちにお礼状を書きましょう」という配慮も忘れず、皆で寄せ書きを作成しました。

(5) クリスマス会

班長から「班長会でクリスマス会で発表をするかしないか決めてくださいと出ていますのでみなさんどうしますか」と発言がありました。皆さん発表したいという事でしたが、いざ何をするかは出てきませんでした。近況報告の中で「インフルエンザが流行っているので気を付けよう」という発言から、どう気を付けたらよいかなどを話しあうことができました。そこで担当者からインフルエンザ予防の話題をもとにクリスマス会発表するのはどうかを提案していました。今年もインフルエンザが猛威を振るい、報道や職場の啓発などで、「インフルエンザ予防」は学級生の意識に

はしっかりあるようで、やる気になり、言葉だけの発表でなく、字や絵を描いてインフルエンザ撃退法を発表しようという話し合いになりました。発表当日は学級ソングの「健からソング」を♪さあ、みんなでスクラム組んで戦え、健からファイトだ、ファイトお〜♪と歌い、インフルエンザの風船が割れるはずでした。発表では撃退のタイミングはイマイチでしたが、この冬、インフルエンザに感染したのは担当者ぐらいで学級生は全員インフルエンザに罹ることなく過ごせました。

(6) 成果発表会

成果発表会の前、2月3日の活動日、成果発表会の話し合いの後、豆まきをしに近くの公園に行きました。その後、センターに帰り、つづきの話し合いをしているときに、横になっているおおがらが突然、怒り出し「KSさんが、僕の頭を蹴ったー」と指差したのです。その勢いに部屋にいた皆がびっくりしました。日頃ほとんど発言をせず、友達との関係性があまり見られず、コース内のメンバーの名前を呼んだことがなかったADさんが大声で名指ししたことに、一同驚きと共に感動しました。しかし、共感する間もなくADさんからKSさんへの反撃が始まり、それを夢中で担当者が制止し、やっと収まりました。頭を蹴ってしまったKSさんに理由を聞くと「イライラしていたから」ということでした。自分の行為を反省したKSさんがADさんに謝ってその日は収まり、両家庭にトラブルの次第を話し、変化が見られたら受け止めていってほしいことを伝えました。担当者として二人の思いを察知することができず、大きく反省をしました。

3月初め、コースが一丸になって取り組む成果発表会で発表ができるのか、とても心配しました。しかし、当日、かつて成果発表会で舞台上に立って発表することのなかったADさんは皆と一緒に参加し、「KSさんの大好きなアイスクリームのお店に行きました」と前活動のわだかまりなく、見事に発表しました。

発表会前に、班長がセンター内にある喫茶にケーキとコーヒーを予約しました。当日、食後のティータイムでADさんに「何ケーキを注文したんですか」と尋ねると「ミルフィーユ！」と即、返事が帰ってきて、ADさんとの関係がぐっと近づいてきたのがわかりました。

(7) 仲間づくり

① 係の仕事

合宿が終わり、前期総括を作成時に班長、副班長の仕事で日中頑張る班長副班長の支援をしていないことに気づきました。11月からでしたが係など役割を明確にし、皆で確認しました。朝の出欠をとる、テーブルやイスを設定するなど係の仕事を支援していきましました。一人ひとりに支援していくことで上達していくことを周りの学級生が認め、学級生自身もうまくできるようになってきたことを実感していくようになってきました。出欠をとる班長の声が小さいと周りの学級生が私語をやめて注目する、テーブルとイス出しを手伝うなど、他の学級生に協力することや相手を尊重する姿が見られてきました。

「今日は休みだから私が代わってやります」と互いの存在を認識し、仲間意識が深まっていきました。

4. 課題と展望

活動で行いたい事の一つのボッチャは、投げる練習は何回か行いましたが、試合形式の活動は行うことができませんでした。実践の活動は、それに向かっていく活動として昨年度は多くの意義がありました。勝利するためのいろいろな経験や、ルールを忘れないうちに、ボッチャは来年度再度、経験していきたい活動です。

前期総括にて、活動を顧みて、担当者の意識に抜けていた事があったことに気づき、後期から取り組んだ係の仕事は、学級生自身が個々の事ととらえ積極的に活動する姿が見られました。また、それを互いに認め合う姿を発見することができました。

学級生との活動は、活動後の担当者会議で担当者同士思い起こしすることで共有していきます。しかし、当日だけ参加する担当者は担当者会議に参加しないため、活動の共有をすることができない悩みがありました。担当者同士、同じ気持ちを持って取り組めるよう前期、後期に総括の話合いの時間を持ちました。毎回思い起こしを行って共有するより時間差はありますが、総括で話し合う事で、学級日だけ参加する担当者が学級生との関わり方について共通理解を持ってました。総括で話し合い確認する事は、少ない担当者体制でも、より良い活動ができるようにしていくために必要なことであり、一つの方法だと思いました。



こうみんかんがっきゅう ゆめ
公民館学級 夢のあかりコース

かつどう なが
活動の流れ

6月10日	かいきゅうしき 開級式
6月17日	じこしょうかい <small>こんご</small> 自己紹介、今後やりたい事
7月1日	かつどうほうこうぎ 活動方向決め
7月15日	はな あ <small>げき ないよう</small> 話し合い (劇の内容)
9月2日	ちようり 調理
9月16日	センターまつりの話し合い
10月14日	はな あ <small>うた</small> 話し合い・歌づくり
11月4日	はな あ <small>うた</small> 話し合い・歌づくり
11月17日	がつしゆく <small>にちめ あき か だ</small> 合宿1日目：朝ごはんの買い出し・歌の練習・コース発表
11月18日	がつしゆく <small>か め ちようしゆく</small> 合宿2日目：朝食づくり・シナリオづくり
12月2日	クリスマス会の練習
12月16日	クリスマス会
1月20日	せい か <small>はっぴようかい じゅんび</small> 成果発表会の準備
2月3日	せい か <small>はっぴようかい じゅんび</small> 成果発表会の準備
2月17日	せい か <small>はっぴようかい じゅんび</small> 成果発表会の準備
3月3日	せい か <small>はっぴようかい</small> 成果発表会

1. 夢のあかりコースの特徴

夢のあかりコースでは女性4名男性9名の計13名の方で活動してきました。

筆談によるコミュニケーションの援助なしにリーダー的な役割を担う人として3名の学級生がいます。簡単なやりとりは可能ですが、まとまった意見は、コミュニケーションの援助が必要なメンバーとして7名の学級生がいます。コミュニケーションの援助がなければほとんど意思表示がむずかしい学級生として1名の方がいます。

学級生が、やりたい事として挙げているのは、基本的にはミュージカルづくりです。その他にも調理や外出の希望も持っています。



2. 活動のねらい

劇ミュージカルコースでは、若葉とそよ風のハーモニーコンサートに向けたミュージカルづくりをしたいという意見がありました。そのため、歌づくりに加えてストーリーづくりをすることになりました。

そのほかにも、自分たちの生活について語り合いたいという意見が出ました。

3. 活動の様子

(1) ストーリーづくり

ミュージカルをするにあたり、どんなテーマ・内容について取り組むかを話し合い、やまゆり園の事件についての劇をする事になりました。学級生の方が出した様々なアイデアを一人の学級生がまとめる形で物語が完成しました。この中の話し合いでは、花のすばらしさについて伝えたいと話した学級生がいました。そこで、熊とやまゆりの花が出てくるストーリーをつくりました。

熊が花を踏み荒らす。花が枯れてしまったのは、熊が蜜を取るのに役に立たない花は、意味がないと考えたからだ。やまゆりの花がむざんにふみしだかれたことに悲しんだ山の神様が、すべての花に咲くのをやめるように命令した。

その命令にしたがった花たちはいっせいに咲くのをやめたので、山から花が消えてしまった。

花が枯れてしまったことを悲しんだ僕たちは、どうにかしてやまゆりをはじめとする花たちが、もう一度咲けるようにと考えをめぐらせたところ、とにかく、失われた花たちの価値を大地に向かって祈るようにささやくことにした。

すると、祈りが届いたのか、大地からささやくような声で、「山奥に秘密の種が眠っていて、未来の花は咲かない」ことを知り、本当の花の心の歌を山中に伝えることにした。

歌声がどんどん大きくなっていき、花の種をまく時期が訪れて、みんなで祈りを込めて、花の種をまいた。

(2) 劇について

劇ミュージカルコースの中でどのように発表をするかという話し合いをしました。演技をする

ことは難しいと考^{かんが}え、今^{こんかい}回は演^{えんぎ}技^ぎをせ^せず^ずに、ス
トリーを^よ読^あみ^あげることと、登^{とうじょう}場^{じんぶつ}人物^{ぶつ}のセリフ
を^よ読^あみ^あげること、歌^{うた}を歌^{うた}うこと、絵^えを描^かいて添^そ
えるかたちで発^{はつひょう}表^{ひょう}しようとい^いうこと^こに決^きまりま
した。その中^{なか}で、一^{ひとり}人の学^{がっ}級^{きゅう}生^{せい}が、絵^えを描^かくこと
が得意^{とくい}で熊^{くま}の絵^えを描^かきました。他^{ほか}の学^{がっ}級^{きゅう}生^{せい}も、劇^{げき}
に出^でてくる花^{はな}や泉^{いづみ}を描^かきました。

(3) 歌^{うた}づくり

歌^{かし}詞^しは学^{がっ}級^{きゅう}生^{せい}がス^きトリー^{かんが}を聞^きいて考^{かんが}えてい
ました。その歌^{かし}詞^しに他^{ほか}の学^{がっ}級^{きゅう}生^{せい}がメロディ^{めろでい}ーをつ
けていきました。

学^{がっ}級^{きゅう}生^{せい}は、日^ひ々^びの生^{せい}活^{かつ}の事^{こと}や思^{おも}っている事^{こと}をス
トリーに重^{かさ}ねながら考^{かんが}えていました。

メロディ^{めろでい}ーをつ^つけてい^いく時^{とき}には筆^{ひつ}談^{だん}を^{もち}用^{もち}いまし
た。言^{こと}ば^ばがうま^まく話^{はな}せ^せない人^{ひと}も自^じ分^{ぶん}の考^{かんが}えていた
メロディ^{めろでい}ーを^{つた}え^え歌^{うた}にする^{する}こと^こが^で出来^きました。

花^{はな}のすばらしさ^さにつ^ついて^{つた}え^えたいと^{はな}話^{はな}した学^{がっ}
級^{きゅう}生^{せい}も^いました。

学^{がっ}級^{きゅう}生^{せい}からは、私^{わたし}たち^{たち}にも無^む言^{ごん}の中^{なか}にも言^{こと}ば^ばが
ある事^{こと}を^{つた}え^えたいとい^いう意^い見^{けん}が^で出^でました。今^{こん}回^{かい}の
活^{かつ}動^{どう}では全^{ぜん}部^ぶで6^{きよく}曲^{うた}の歌^かが^{かん}成^{せい}しました。

1. 熊^{くま}の歌

みつのとれない花^{はな}なんて
まったくやくにた^たないから
おれさまがぐしゃぐしゃにふみつ^つぶしてやる
みつのとれない花^{はな}なんていのち^ちにい^いみが^がないの^のだ
から
ぐしゃぐしゃにふみつ^つぶせ
ぐしゃぐしゃにふみつ^つぶせ

2. 踏^ふみ^みし^しだ^だか^かれた^{れた}やまゆり

やまゆりが^こん^んな^なに^にむ^むざ^ざん^んに^にふ^ふみ^みし^しだ^だか^かれ^れて
やまゆりは^どう^うして^てい^いか^かわ^わら^らない^いま^まま
知^ちら^らない^い世^せ界^{かい}に^に旅^{りょ}立^たっ^つて^てい^いった
私^{わたし}たちは^いま^ま深^{ふか}い^い悲^{かな}しみ^みの中^{なか}で
やまゆりを^ただ^だ心^{こころ}から^らし^しの^のぶ^ぶだ^だけ
やまゆりを^もう^う一^{いち}度^どよ^よみ^みが^がえ^えら^らせ^せる^るた^ために
私^{わたし}たちは^もう^う一^{いち}度^どた^たち^ちあ^あが^がろ^ろう

3. 真^まっ^つ暗^{あん}な^な世^せ界^{かい}

ま^まっ^つくら^らな^な闇^{やみ}の中^{なか}
世^せ界^{かい}の^すべ^べて^ての^の花^{はな}が^あい^いほ^ほこ^こる^るの^のを^をや^やめ^めた
僕^{ぼく}たち^ち心^{こころ}から^ら花^{はな}が^あい^いほ^ほこ^こる^るの^のを^をや^やめ^めた
僕^{ぼく}たち^ち心^{こころ}から^ら花^{はな}が^あい^いほ^ほこ^こる^るの^のを^をや^やめ^めた
勇^{ゆう}気^きも^も未^み来^{らい}も^も消^けえ^えた
ざん^{ざん}こ^こくな^な熊^{くま}の^しわ^わぎ^ぎで
失^うわ^われた^た花^{はな}を^とり^りも^もど^どす^すた^ため
僕^{ぼく}ら^らは^たち^ちす^すく^くむ^むだ^だけ^けだ^だが
こ^この^の手^てで^で未^み来^{らい}の^の花^{はな}を^とり^りも^もど^どそ^そう

4. 秘^ひ密^{みつ}の^いづ^づみ^みを^を探^たし^しに^に行^いこう

ま^まっ^つすぐ^ぐ向^{むか}い^いの^の山^{やま}ま^まで
み^みん^んな^なで^で秘^ひ密^{みつ}の^いづ^づみ^みを^を探^たし^しに^にゆ^ゆこう
秘^ひ密^{みつ}の^いづ^づみ^みが^どこ^こに^に眠^ねっ^つて^てい^いる^るか^か探^たり^り当^あて
秘^ひ密^{みつ}の^いづ^づみ^みの^みず^ずを
か^かれた^た花^{はな}に^そそ^そい^いで^であ^あげ^げて
世^せ界^{かい}中^{ちゆう}に^に新^{あたら}しい^い花^{はな}を^あい^いほ^ほこ^こせ^せよ^う

5. 私^{わたし}たち^ちには^に言^{こと}ば^ばが^ある

わ^わた^たし^した^たち^ちには^にこ^{こと}ば^ばが^ある
そ^それ^れを^を伝^{つた}え^える^るす^すべ^べも^もな^なく
わ^わた^たし^した^たち^ちの^のい^いの^のち^ちは^はか^かな^なく^くき^きえ^えた
こ^この^のま^まま^ま消^けえ^えて^てし^しま^まう^うに^には
あ^あま^まり^りに^にこ^ころ^ろ残^{のこ}り^りだ^だか^から

せめてほんとうのすがたを
みんなに知ってほしい

6. 光がもっと届きますように
光がもっとこの世界にとどきますように
みんなで新しい花をさかせよう
あたらしい花のいのちは
あのふみしだかれた花の
いのちのやどったものだから
かなしみをのりこえてもういちど
うまれかわったいのちなんだ
もっともっと高らかにうた声をひびかせて
ひかりがもっとさすように

4. 課題と展望

2018年度の劇ミュージカルコースの最大の成果は、学級生自身の手で、ストーリーも歌も絵も生み出されたことです。ストーリーについては、これまでも、学級生自身が話し合いを重ねて作るということは、当然のことでしたが、どうしても、その話し合いの内容をまとめるのは担当者の役割になってきました。しかし、今回は、話し合われた内容を、一つの物語としてまとめあげたのも、学級生自身でした。また、歌づくりについて、歌詞に関しては、学級生自身がつくることは少なくありませんでしたが、メロディーづくりは簡単ではありませんでした。しかし、メロディーづくりも一昨年の劇ミュージカル以降、少しずつ見られるようになりました。その中で、今回、歌詞はすべて学級生のもので、かつ、メロディーも5曲中4曲を学級生自身がつくることができました。

ただ、今回のミュージカルでは、演じるということが課題として残ってしまいました。すでに、ストーリーづくりや歌づくりでエネルギーと時間を使っていたこともあるのですが、なかなか演じるのが苦手なメンバーが多いため、今回は見送ろうということになってしまったのです。たしかに、演じるのが得意なメンバーが少ないのも事実ではありましたが、青年学級の成果発表会は、そういう状況であってもやれることを工夫してきました。しかし、今回そのような工夫を提案できなかったのは、担当者の側の見通しの弱さがあったかもしれません。

津久井やまゆり園のテーマに取り組むということについては、事件以来、学級全体で繰り返し話し合ったきたテーマですが、今回は、わかそよを強く意識して、コンサートづくりコースがわかそよ全体を企画するという役割を担っていたことに対して、自分たちは、わかそよの内容をきちんと作り上げていくという思いで取り組んできたものでした。できれば、わかそよのミュージカルの台本にアイデアを提供できればと思ってきたものでしたが、残念ながらそこまでにはいたらず、2部の中に組み入れるかたちになりましたが、この重要なテーマに正面から取り組むことができたことは大きな意義を持っていたと言えるでしょう。重いテーマではありますが、今後も引き続き何らかのかたちで継続していくべきものではないでしょうか。

ふみしだかれたやまゆり

作詞作曲 寺本勝浩

♩ = 64

A F#m D A
 やまゆりが こんなにむぎんに ふみしだかれて やまゆりは
 A F#m7 D A
 どろしていいが わからないまま しらないせかいに たびたいていった
 C#m Bm A
 わたしたちはいま ふかいかなしみの な が で やまゆりをただ
 D F#m A D E7
 ここから しのぶだけ やまゆりを もらいちど
 D A E7 A D E7
 よみがえらせる た め に わたしたちは もらいちど
 A E7 A
 たち なが ろう

くまの歌

作詞・作曲 寺本勝浩

C Em F Em
 み つ の と れ な い は な ん て
 F Am G
 まっ た く や く に た た が ら
 F Am Em Am
 お れ さ ま が く し ゃ に
 Dm F G
 ふ み つ ぶ し て る
 C F Em
 み つ の と れ な い は な ん て
 Dm Em G Am
 い の ち に い み が な い が ら
 Dm Am Em Am C
 く し ゃ く し ゃ に ふ み つ ぶ せ
 Dm G C
 く し ゃ く し ゃ に ふ み つ ぶ せ

光がもつと届きますように

作詞 森原清美 作曲 柴田保之

Musical score for "光がもつと届きますように" (Light will reach you). The score is written in G major, 4/4 time. It consists of 11 staves of music with lyrics in Japanese. The lyrics are: ひかりがもつとこのせかいにとどきますように / みんなであたらしいはなをさかせよう / あたらしいはなのいのちはあふみしだかれたはなの / いのちのやどとったはなだから / かなしみをのりこえてもらいちど / うまれかわったいのちなんだ / もつともつとたからかにうたごえをひびかせて / ひかりがもつとさますように

わたしたちには言葉がある

作詞 寺本勝昭
作曲 小菅浩子

Musical score for "わたしたちには言葉がある" (We have words). The score is written in C major, 4/4 time. It consists of 4 staves of music with lyrics in Japanese. The lyrics are: わたしたちにはことばがある それをつたえるすべもなく / わたしたちのいのちははかなくきえた / このままきえてしまうにはあまりにこころのこりだから / せめてほんとうのすがたをみんなにしまってほしい

1. 班長会

(1) 班長会の概要

班長会とは、学級全体に関わる行事や、運営に関わるさまざまなことを調整する組織です。学級活動終了後の4時過ぎから5時までの時間を使い、各コースの班長と副班長が集まり話し合いを行ってきました。

活動内容としては、各コースの活動報告、合宿やクリスマス会・成果発表会などの行事に向けた話し合いおよび実際の準備や運営を行ってきました。なお、行事に関する話し合い・準備・運営は、つどい委員と合同で取り組みました。

(2) 班長会の様子

各コースの青年1～3名と担当者が集まり行いました。昨年度と同様に、会を進行する司会と班長会ノートの記入は各コースの持ちまわり制としました。班長会ノートには、その日に話し合った内容を記録しました。活動報告と次回コース内で話し合ってもらいたいことなどをまとめ、「班長会ニュース」を書いて学級全体に向けて発信しました。

昨年度に引き続き班長、副班長を務める青年もおり、その青年が中心となり、話し合いや各コースの振り返りをスムーズに行うことができました。

(3) 評価と課題

これまで同様、一年間継続して話し合いを進めることができました。各コースで話し合っただけで意見を班長会で発表し、検討を行いました。班長会で決定した内容については、班長会メンバーからつどいの時間を使って全体に対して説明をする、または、班長会ニュースに記載することで学級全体へと発信しました。各コースの代表として集まり、意見の集約・決定・伝達をするという役割を務めることができました。

班長会ニュースは司会を務めたコースで作成す

ることになっており、班長会が終わったあとに青年が執筆しています。行事の直前になると話し合いが長引くことがありました。そういった時間に余裕のないときは担当者が代わりに執筆することもありましたが、青年が記述する部分を取り入れるなどの対応を取りました。このような取り組みをすることで、班長、副班長としての役割を確認し、青年による情報発信を行うことができました。

今年度の反省点としては、昨年に引き続き担当者の連携不足が挙げられます。ほぼ毎回同じ担当者が出席するコースもありましたが、出席する担当者が流動的なコースもありました。よって、班長会がスムーズに始まらない、司会担当のコースがうまく話を進めることができないといった問題が生じました。限られた時間を有効に使うために、以下のような対策を取ることが求められます。事前の担当者会で出席できる担当者を確認・確定しておく、次回の班長会で話し合う議題をメッセージアプリなどのツールを活用し事前に全担当者で共有するなどです。

2. つどい委員会

(1) つどいとは

学級日の始まりと終わりのコース活動の前後に行われている活動です。ホールに集まり、全コースの青年が集い、学級ソングを歌い、学級全体で一体となれる時間となっています。また、コース間での連絡や応援者、見学者の紹介などもここで行われています。有志の青年とつどい委員担当の担当者で運営、活動しています。

(2) 運営体制と活動内容

今年度は、男性3名、女性2名の青年、計5名体制で運営を行いました。その中に、同じ職場で働く青年から誘われ、初めてつどい委員を務めた青年がいました。例年固定化しがちなメンバーの中に新しい風が吹きました。班長会とならぶ自治活動の一つであるつどい委員会に「挑戦してみよう」という青年が現れたことは、今後のつどい委員会にとっても、明るい出来事であるでしょう。

活動内容は、つどいの司会進行、見学者・応援者の紹介、つどいで歌う学級ソングの曲決め等です。また、学級終了後のつどい委員会で決定した、取り決めや次回の司会者・歌う曲などを「つどいニュース」として発行し、学級全体への周知を行いました。昨年度の展望にもあったように、今年度は当初からリクエストボックスを活用し、つどい委員会のメンバー以外の青年からも歌いたい曲を募り、反映させていきました。

また、つどいの時間は全員が一堂に会する貴重な時間となります。活動への活力を高めるための場所だけでなく、近況報告や問題提起、学級全体

に関わることを話し合うのにとっても重要な時間となっています。

(3) 今年度の活動の特徴

今年度の活動の特徴として大きくあげられるものが3つあります。

《1. つどい委員が企画した「新年会」の実施》
学級全体でクリスマス会を行うことが決定しましたが、「新年会をやりたい」という声も少なくありませんでした。そこで、つどい委員会では、朝のつどいをコース活動に支障が出ない程度にいつもより少し長く時間をもらい、その中で「新年会」を行うことにしました。

クリスマス会を開く目的があるなら、新年会を開く目的もあります。「新たな年の幕開けをみんなで祝い、それぞれが抱く期待や抱負を共有する場にしよう」と話し合われました。「お正月と言えば…」という話し合いから、和太鼓の演奏・福笑い・書き初め等が上がり、和太鼓を習っている青年に協力を依頼し、盛大なパフォーマンスを披露してもらいました。大きな福笑いや大きな模造紙に書いた書き初めも好評でした。青年の意見や思いをこういった形で反映し、取り組みに移せることは、つどい委員会の強みであると思います。

《2. コース活動を超えての検討・共有の場として》

2019年5月に控えていた「第19回若葉とそよ風のハーモニーコンサート」(以下、わかそよ)ですが、今年度は「わかそよづくりコース」が中心となり実行委員会への参加や話し合いが進められていました。わかそよ実行委員会への参加は自由ですが、学級活動に位置づけられていないので、

送迎や日程調整の関係で参加できる人は限られてしまいます。そんな中で、実行委員会で話し合われたことの報告や次回の実行委員会へ持って行く意見の収集・集約等はつどいの時間の中で行われました。

実行委員会に参加できない青年にとっては、進捗状況を知る場にもなり、自分の意見を発信できる場にもなります。また、わかそよづくりコースとしても、より良いコンサートにするための反映させるべき意見を収集できる、恰好の場となったことでしょう。まさに「みんなで創り上げるコンサート」にするためには欠かすことのできない時間であったと思います。

《3. 仲間の死を悼む》

昨年度退級した青年の訃報が入ったのは10月のことでした。長年、リーダーシップをとって劇ミュージカルコースや公民館学級を牽引してきた方でした。訃報は、朝のつどいの中で担当者から伝えられ、みんな悲しみに包まれました。

大切なことは、亡くなった仲間に想いを馳せ、思い出を語り、その人が生きていた証を共有することです。誰からも慕われていた面倒見のよい故人に対し、付き合いの長い青年から学級歴の浅い青年まで、話が尽きなかったことは言うまでもありません。スクリーンに映し出される笑顔の写真を見ながら、故人にゆかりのある歌をみんなで歌いました。仲間の死はとても悲しい出来事ですが、丁寧に真摯に向き合うことであたたかい気持ちになれる時間でもありました。

これまでも、こういった大事な出来事を共有する場として位置していたつどいの時間ですが、今年度、つどい委員の発信で「新年会」を企画・

実行できたことは、つどい委員会の自治運営力を物語る出来事であったと思います。

(4) 活動の評価と展望

「(3) 今年度の活動の特徴」でもあげたように、つどいの時間というのは限られた時間ではありますが、みんなの要望やアイディアで無限の可能性を持った時間になります。慣習的な流れを大事にすることももちろん大切ですが、その枠にとらわれず、その時その時に必要である活動に柔軟に取り組んでいくことが、今後もつどい委員会に期待されていることなのでしょう。

第3章 考察

1. 2018年度のコース編成とその取り組み

今年度の公民館学級は、昨年度活動が展開された「歌楽器コース」、「ものづくりコース」、「健康からだづくりコース」、「暮らしコース」、「劇ミュージカルコース」の5つに加えて、「コンサートづくりコース」という新たなテーマで活動するコースが生まれ、計6コースで活動が行われました。

「コンサートづくりコース」は、活動の早い段階で名前を「わかそよづくりコース」と変えましたが、翌年度5月に開催された「若葉とそよ風のハーモニーコンサート（以下「わかそよ」。内容は○章に記載）」に向けて、そのコンサートのテーマであったり、内容であったりや考え話し合うコースとして作られたものです。

もともと文科省による障がいをもつ方の生涯学習支援の取り組みがきっかけになったものの、「わかそよへの意見反映の機会が実行委員会に参加できるメンバーに限られる」という、以前から青年より拳がっていた課題に対し「学級活動内でわかそよに向けた取り組みを積極的に行いたい」という思いも、このコースの誕生の大きなき

っかけとなりました。

このコースが作られる際、学級の活動時間を使い、担当者を含め青年間では様々な話し合いが行われましたが、「これまでの歌楽器コースとわかそよづくりコースの違いは何か？」や「このコースに入らないとわかそよについての取り組みに参加できないのか？」などの課題を徐々に整理していく中で、わかそよづくりコースの活動の特徴として、「わかそよ実行委員会の準備段階としてテーマ等の話し合いを他学級の青年とともに開催し、わかそよ実行委員会にもその中心として参加していく」、「わかそよづくりコースはあくまでもわかそよのテーマや構成について考えるコースで、わかそよに向けた内容づくりはコース単位で行っていく」というようなものが、それぞれの共通認識として浮かび上がってきました。

わかそよづくりコースでは、一年を通してわかそよに向けた多くの話し合いを重ね、また、メンバーであった浅井さんは今回のわかそよの実行委員長となりコンサートを引っ張っていくことになりましたが、成果として取り上げられるべきこ

とはそれだけではなく、わかそよに向けた多くの
取り組みがわかそよづくりコース以外でも展開さ
れることとなったこともこの成果だと思われま
す。
劇ミュージカルコースに活動で作られた朗読劇は、
短くしたものがそのままわかそよのステージの
内容に組み込まれましたし、ものづくりコースで
作られた大きなひまわりの絵は、そのステージ上
を賑やかに飾ることとなりました。

青年学級の意義として、障がいをもつ人たちが
この場でたくさんのお話を学ぶということはひ
とつ重要な事ではありますが、それとともに、そ
の学びを通して、どう社会にいかしていくかとい
うこともまた重要であり、わかそよという広く開
かれたステージでの発表を目標に、様々な取り
組みが各コースで行われたということは、障が
いをもつ人たちの学習の場としてより有意義な
ものとなったように思います。わかそよは現在、
2年に一回の開催を予定しているため、来年の
開催はありませんが、活動内で積み重ねる学びの
成果を大切にするとともに、それを社会にどうい
かしていくのかを担当者は青年とともにさらに

考えていかなければならないかもしれません。

2. 杉本好朗さんについて

長年リーダーとして、青年学級を引っ張ってき
た杉本好朗さんが昨年亡くなりました。過去、
NHK が開催したシンポジウムに当事者として
登壇しスピーチした姿は全国放送もされました
が、国内の障がい者福祉の歴史に大きく関わって
いたこともある杉本さんも、ここ数年は学級の
先輩として新たなリーダー達を支えるさらに大き
な存在となっていました。亡くなられたことにつ
いては学級全体でも、つどいや合宿を通して振
り返り、今後の自分たちの活動につなげようとす
る取り組みが行われましたが、各コースでも同様
に杉本さんの死を偲びながらも前に進もうとする
活動が多く実施されました。暮らしコースでは、
杉本さんについての作文を全員で書き成果
発表会での発表につなげましたし、コンサート
づくりコースでは、直接名前はいれなかったもの
の杉本さんについて書いた歌が作られました。歌
からは、これまで杉本さんが社会を変えようと多
くの活動に参加してきたこと、どんな人に対して

も優しく接してきてたくさんの人に愛されていた
ことがうかがえます。

今はない私の仲間は
この舞台上で何を話しただろう
多くの困難を乗り越えてきたから
言葉に優しさ溢れている
差別に声を上げてきたから
命の価値を今伝える
歌「私の気持ちをつたえたい」より

3. 他学級との連携について

これまでも青年学級では、学級間での交流等
を目的とした活動（キックベースの交流試合や、
クリスマス会などの招待など）を行ってしまし
たが、今年度は、わかそよに向けた活動の中で、
他学級と連携をしながら活動をつくる場面が多
くありました。わかそよ実行委員会が開催される
前には、わかそよづくりコースや歌・楽器コース
に加え、他学級やとびたつ会の人たちとともに
意見交換をする機会を定期的ににつくることができ、
年度の後半からは、わかそよ実行委員会が開催さ
れるようになり、わかそよづくりコースのメンバ
ーを中心に公民館学級の青年も委員会に参加し
ていきました。

公民館学級での開催もあったものの、他の
学級の活動内での開催も多くあり、その際には、
これまであまり言葉での表現をする機会がなか
った青年が、委員会にて筆談を通してたくさんの
思いを言葉で表現することとなりました。

これまでのわかそよでは、実行委員会に参加で
きる人たちが中心になり、内容が組み立てられて
きましたが、今回のわかそよがこれまでと大きく
違う点としては、これまでわかそよについて思い
を語る機会が無かった人たちが、内容を作ってい
く段階で内容についてや、普段から抱えている
各々の思いについて話し、その構成に関わること
ができたことだと思います。

たくさんの意見をまとめて、なにかを決めてい
くことは、当然容易ではなく、今年度話された多
くの言葉がわかそよという舞台にどれだけ反映で
きたかは、疑問が残るところもありますが、多く
の意見を拾い上げるための、学級を超えた連携が
また新たにひとつスタートしたように思いますの
で、わかそよをはじめ、多くの活動の場がそれぞ
れ、青年が主体的に関われる場となるよう、この

つながりを維持し続けられればと思います。